近代日本版画家名覧
（1900－1945）

〈凡　例〉

1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。

2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。

3、年記は西暦を基本として、生没年については（　）内に元号を表記した。

4、作品名は《　》、書籍・雑誌・作品集などは『　』内に表記した。〔　〕内は執筆者補記を示す。

5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。

6、頻出する参考文献については以下のように表記する。

・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版　2008年）→『創作版画誌の系譜』

・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版　1991年）→『エッチング』

7、執筆者

岩切信一郎（元新渡戸文化短期大学教授）
尾形恭介（讃岐版画の会事務局）
河野　実（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
西山純子（千葉市美術館学芸員）
森　登（学藝書院）
植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）
滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）
三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）
樋口良一（版画堂）

8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ http://www.hanga-do.com/ でもご覧いただけます。

戦前に版画を制作した作家たち（13）

【た】（後半）

多ケ谷信乃（たがや・しの）

竹久夢二の表紙絵・口絵・挿絵で知られる『婦人グラフ』（石原俊明発行　国際情報社）は、1924（大正13）年5月創刊号から1928（昭和3）年11月号（第5巻11号）まで月刊形式で全55冊刊行された。夢二は創刊号から木版やオフセット図版で誌面を飾り人気を博すが、1926年9月号（第3巻第9号）に多ケ谷信乃が同号口絵に木版画《新涼来る》を制作するなどして関わるようになると、翌1927年には多ケ谷が中心となって編集は一新される。多ケ谷は同年1月号（第4巻第1号）表紙絵を自身の木版画《無題》で飾り、夢二は自らのスキャンダルなどが影響して、同年2月号（第4巻第2号）の木版口絵《山・山・山》を最後に『婦人グラフ』を去る。多ケ谷は同年3月号（第4巻第3号）の表紙絵に木版画《三月》を制作、同号「編輯を終りて」で、「あらためて御挨拶申上げます今次野川香文なる良き男を連れて私が此の雑誌を領る事になりましたから何分よろしく御愛顧をお願い致します。（略）口絵、ながらく皆様に見へて居ました夢二先生に一寸の間後線に廻って戴いて本號から突然新人を羅致して見参してみました。」と記し、口絵に東京美術学校出身で帝展入選歴があり抒情的な絵を描く松島白虹を登用（木版画《支那娘》）。以降は恩地孝四郎（4月号表紙絵）、多ケ谷信乃（5月号表紙）、岩田専太郎（6月号表紙絵）、榎本千花俊（4・5・6月号口絵と7・8月号表紙絵）など自身も含め若手作家を登用するが、同年9月号（第4巻第9号）あたりから多ケ谷の名前が消え、『婦人グラフ』は1928年11月号（第5巻第11号）刊行後、同年12月号を「昭和聖帝御即位大典画史」のため休刊（11月号との合併号）とし、1929年新年号について「面目一新、美装充実の本誌になりませう」と予告するも、結局刊行出来ず休刊となる。「『婦人グラフ』から夢二を追放した男」と言われる多ケ谷だが、経歴はよくわかっていない。ただ、荒木滋子編・多ケ谷信乃画・石原玉吉装幀の絵本『ピーターパン』（国際童話撰集1　国際情報社　1926）の刊行広告が第3巻第7号（1926.6）より巻末に掲載されていて、多ケ谷について「新進の童画家」と紹介、また『婦人グラフ』に当初から口絵や表紙絵を描いて関わり続けた石原玉吉の装幀とともに、順次輯を重ねる旨を予告するが、その後については不明である。【文献】中右　瑛「大正ロマンのノスタルジー夢二と『婦人グラフ』雑感」『版画芸術』71（阿部出版　1991.1）／『モダンガールズあらわれる　昭和初期の美人画展』図録（島根県立石見美術館2008）（樋口）

武井愛之助（たけい・あいのすけ）

木口木版を手掛け、1938（昭和13）年の造型版画協会第2回展に《熱帯風景》が初入選。以後、第3回展（1939）に《山家》、第4回展（1940）に《野戦病院》《肖像》と原版、第5回展（1941）に《熱帯風景》《風景》、第6回展（1942）に《肖像》《洗濯》、浜松展（1942）に《山家》《海景》《洗濯》、第7回展（1943）に《大和島》《山道》《山岳》《風景》《熱帯》《肖像》を出品。その間、1940年には会員に推挙された。恩地孝四郎は、第2回展出品作について「武井愛之助君の「熱帯風景」（木口木版）などたのしい」（「造型版画第二回展」『みづゑ』400　1938.6）と評するも、第4回展出品作については「武井愛之助君の木口木版、技は上乗であるが、複製的表現を一歩も出てゐない。この会にこの作趣のあるのは奇異である。武井氏その技を創作に生かす日を待つ」（「夏の版画　造型版画」『日本版画協会々報』34　1940.10）と苦言を呈している。【文献】『造型版画協会第二回展目録』（1938）～『造型版画協会第七回展目録』（1943）／『みづゑ』400／『日本版画協会々報』34　（三木）

武井　淳（たけい・あつし）

1938（昭和13）年の造型版画協会第2回展に木版画《空》が入選。恩地孝四郎は「武井淳君は摺で失敗に了らして了つた。材料の選み方の杜撰である」（『みづゑ』400　1938.6）と評している。【文献】『造型版画協会第二回展目録』（1938）／『みづゑ』400　（三木）

武井勝雄（たけい・かつお） *1898～1979*

1898（明治31）年群馬県に生まれる。東京府立青山師範学校を卒業後、東京美術学校図画師範科へ入学し、1922年に卒業する。同年4月から1923年5月まで熊本県宇土中学校に勤務した後、上京。1923年9月、東京市中央区の文海小学校に赴任するが、初日に関東大震災に遭遇。1929年、東京市永田町小学校校長となる。30歳の頃、後輩に奨められて、川喜田煉七郎が運営するドイツのバウハウスに範をとった造形・表現教育を行う「新建築工芸学院」に入学。川喜田はデザイン、建築、工芸といったものに対し、分野にとらわれない横断的な教育「構成教育」を目指した。その川喜田と共著で『構成教育大系』（学校美術協会　1934）を上梓する。戦後は東京都教科研究員、文部省教材等調査委員などを歴任。個人の著作として『構成教育入門』（造形芸術研究会　1955）、『バウハウス・システムによるデザイン教育入門』（造形社　1964）などがある。版画関係では、1933年4月11日に日本エッチング研究所主宰の西田武雄が開催した「第2回エッチング研究座談会」に参加。これは児童生徒へエッチングを普及する目的で、西田が研究所に東京市内の小学校教師を招き、制作過程を実際に試す会であった（『エッチング』6　1933.4）。その時に制作したものと考えられる建物を描いた武井の作品が、研究所機関誌『エッチング』第7号（1933.5）に掲載されている。1979（昭和54）年逝去。【文献】金子一夫「『構成教育大系』の周辺」『構成教育大系』（ゆまに書房　2012）／金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究報告書　第2部　滋賀県～在外学校』（金子一夫　2016）／『エッチング』6・7（加治）

武居勝三（たけい・かつぞう）

長野県師範学校一部3年に在学中、同校生徒が発行した版画誌『樹氷』第1号（1938）に《ふくらう》を発表。1941年同校を卒業。当時長野県下諏訪中学校に勤務。【文献】『樹氷』1／『卒業生名簿　昭和25年』（信州大学教育学部本校　1950）（加治）

武井駒太郎（たけい・こまたろう）

1933（昭和8）年の第3回日本版画協会展に木版画《丸の内屋上展望》を出品。出品時は東京に住む。【文献】『巴里に於ける日本現代版画展覧会準備展覧並第三回展作品目録』（日本版画協会　1933）（三木）

武井武雄（たけい・たけお） *1894 ～ 1983*

1894（明治 27）年 6 月 25 日長野県諏訪郡平野村（現・岡谷市）に生まれる。父は平野村の初代村長。幼時より絵に長じ、4、5 歳にして初の豆本を作り、8 歳の頃には絵描きを志望。諏訪中学校時代に『夢二画集 春の巻』にふれ、その表現世界に強く憧れる。1913 年中学を卒業して上京、本郷洋画研究所に学び、翌年東京美術学校予備科（西洋画科志望）入学。1919 年同校西洋画科本科を卒業、研究生として残り、1920 年に修了した。子供のための絵を志し、1922 年 1 月創刊の雑誌『コドモノクニ』に企画から関わる。同誌のほか数々の媒体で、印刷の限界を理解した作画により独特の造形世界を展開、人気を得る。童話も自ら執筆した。1925 年武井武雄氏童画展覧会（銀座・資生堂画廊）で開催、この「童画」という呼称も武井の創案である。1927 年童画を芸術の一分野に引きあげるべく初山滋や岡本帰一らと日本童画家協会結成、晩年までの長きにわたり、童画界の旗手として活躍した。「イルフトイス」と名付けた一連のおもちゃの制作や、郷土玩具の収集でも知られる。

武井が手がけた膨大な仕事は、印刷も含めばほとんどが「版」によるが、木版では京文社が刊行した楽譜シリーズ『昭和新曲選』の装幀下絵、伊勢辰が出版した 1929 年の『おもちゃ絵諸国めぐり』や 1932 年の『いろは四十八面集』の下絵あたりが早い仕事だろう。自ら製版したものに限定すると、1933 年頃に西田武雄からプレスを購入して始めたエッチングが早い（美校時代にも制作しているがこれは試作にとどまる）。ただし、銅版着手が当時のジャーナリズムや印刷業界への不満に発していたように、武井の目ざすところは「出版美術」であり、版画の仕事も一枚摺は少なく、主に本の領域で展開した。まずは 1935 年の『十二支絵本』に始まる小本の一群がある（1960 年以降は「刊本作品」と命名）。絵と文、装幀を自ら手がけただけでなく、材料から印刷製本まですべてを監督し、あらゆる版式を駆使して生涯に 139 冊を完成させた。また『十二支絵本』の出版からわずかにさかのぼる 1935 年 2 月頃に恩地孝四郎とアオイ書房の志茂太郎に出会っており、彼らとの交流からより贅沢な出版美術が構想されて 1938 年に銅版絵本『地上の祭』着手、関野準一郎を摺師に迎えて 3 年かけて完成させた。アオイ書房からは 1942 年にやはり銅版による『書窓版画帖十連聚 其六 宇宙説』も出版している。これらと並行して 1935 年から版画による賀状の交換会「榛の会」を主催（1954 年まで 20 回開催）、『白と黒』再刊 2 号（1935.7）にエッチングによる《人形》を掲載、1940 年に創設された日本エッチング作家協会にも参加して第 1 回展に《挿画》を、翌年の第 2 回展に《静物》を出品している。1941 年、佐藤米次郎が朝鮮の仁川で開催した蔵書票展覧会に特別出品。さらに戦中の 1944 年、恩地に招かれて日本版画協会の会員となり、第 13 回展に《夏祭》《敵前の童子》《花》（いずれも合羽摺）を出品した。日本版画協会へは戦後も参加して自刻自摺の木版画一枚摺を発表、大型の抽象造形やクレーを想起させる鳥の連作を展開して新境地を見せた。1957 年には第 1 回東京国際版画ビエンナーレに《地球》《植物の世界》を出品、1959 年に児童文化への貢献が評価されて紫綬褒章、1967 年に勲四等旭日小綬章を受けるが、主に本を舞台に挑戦し続けた版の絵の開拓者としての功績も大きい。1983（昭和 58）年 2 月 7 日東京都板橋区で逝去。没後の 1998 年、郷里岡谷市に武井を顕彰するイルフ童画館がオープンした。【文献】武井武雄「私とエッチング」『エッチング』第 7-8 号（1933.5-6）／武井武雄「エッチングと私」『書窓』3 巻 5 号（1936.11）／『武井武雄作品集 Ⅱ 版画』（筑摩書房　1974）／『武井武雄作品集 Ⅲ 刊本作品』（筑摩書房　1974）／『武井武雄 版画小品集』（集英社　1982）／武井武雄著・武井三春編『青の魔法』（彌生書房　1992）／『武井武雄 空想へのいざない展』（茨城県近代美術館　1999）／『創作版画誌の系譜』／『生誕 120 年 武井武雄の世界展』図録（イルフ童画館＋ NHK サービスセンター 2014）／「特集武井武雄 版画の宝石」『版画芸術』164（阿部出版　2014.6）（西山）

武井直也（たけい・なおや） *1893 ～ 1940*

1893（明治 26）年 6 月 16 日、長野県平野村（現・岡谷市）に生まれる。実家は養蚕農家で、1906 年小井川尋常小学校卒業後は家業の農業に従事するが、もともと器用で絵を描くことを好み、岡谷の篆刻家・八幡郊処の影響で画家を志し、1912 年 19 歳で薬剤師か歯科医になると偽り上京する。正則学院で英語を学んだ後、1914 年東京の聖学院中学 4 年に編入学する。同級生に後に日動画廊を開く長谷川仁がいて、以降終生交遊する。この頃から戸張孤雁に師事し塑像を学ぶ。翌 1915 年 22 歳で東京美術学校彫塑科塑像部に入学、同級に雨宮治郎・加藤顕清らがいた。在学中、小井川小学校教師の折井房之をモデルに《F 先生》を制作。戸張との関係から、第 5 回再興日本美術院展に初出品、初入選する。1920 年同校を卒業。1921 年日本美術院研究会員、1924 年院会友に推挙される。同年 11 月渡仏し、ブールデルに師事。1927 年帰国後も院展に出品を続け、1932 年院同人となる。1935 年の帝展改組を機に、翌 1936 年 5 月雨宮光平・加藤顕清・早川巍一郎ら美校出身彫刻家らと「日本彫刻家協会」を結成し、院展を離脱、同年秋の昭和 11 年文展に藤井浩祐の推薦で招待出品する。1937 年第 1 回日本彫刻家協会展と第 1 回新文展からは 3 年続けて日本彫刻家協会と新文展に出品するが、1940（昭和 15）年 2 月 5 日腸チフスのため 47 歳で急逝した。日本彫刻家協会では急遽同年 3 月の第 4 回日本彫刻家協会展（3.13 ～ 22　東京府美術館）に於いて、武井直也の遺作の一部を特別に陳列する。その時の『武井直也遺作展覧会目録』によると、陳列の内訳は、「彫刻・彫像 35 点〔（レリーフを含む〕外。油画 2 点、版画 13 点」で、年代は不詳ながら版画も制作していたようだが、親交のあった外山卯三郎「武井直也氏の遺作展を観る」（『アトリエ』17-7）でも版画については触れられておらず、「版画 13 点」の詳細は確認できていない。【文献】『武井直也遺作展覧会目録』展（日本彫刻家協会　1940.6）／外山卯三郎「武井直也氏の遺作展を観る」『アトリエ』17-7（アトリエ社　1940.6）／『彫刻家　武井直也の軌跡』展図録（市立岡谷美術考古館　2015.10）（樋口）

竹内戛三（たけうち・かつぞう）

1922（大正 11）年に神戸で開かれた神戸弦月画会主催の「創作版画展」（2.23 ～ 26　神戸・三宮三〇九番館）に木版画《雪の夕》《今日も生かされぬ》を出品。出品時は神戸に住む。【文献】『神戸弦月画会主催創作版画展目録』（1922）（三木）

竹内喜久一（たけうち・きくいち） *1907 ～ 1928*

1907（明治 40）年愛知県額田郡常磐村田口（現・岡崎市田口町）に生まれる。竹内杢平は兄。常磐尋常高等小学校を卒業し、絵を習いはじめる。額田郡常磐南小学校

に勤務。当時、岡崎では西洋画への関心が高まり、1925年、近藤孝太郎・杉山新樹・山本鍬太郎らが洋画の研究会「我々の会」を結成し、第1回作品展覧会（1926.4.14～20　会場：岡崎図書館）を開催する。竹内も油彩画《風景》を出品。同年3月、近藤から影響を受けた小野英一・村松隆次・村松ふさは、版画誌『版画』を創刊する。第3号からは短歌の同人誌『草原』と合併し、『試作』（1925-1926）と改題して創刊。竹内は『試作』の同人として、第1年2号（1925.8）に《塔》《木かげ》、第1年3号（1925.12）に《水車》、第2年1号（1926.2）に《運動場》、第2年2号（1926.5）に《山間》、第2年3号（1926.7）に《初夏の町》を発表する。《初夏の町》については村松隆次が「本当にもう一飛と云ふ所まで来ておるが横田良四氏と同じ様な欠点がどこかに有ると思ひます。趣味もよし思ひつきもよい様です。」（『試作』2-3　1926.7）と言葉を寄せている。生地の常磐村田口に住み、1928（昭和3）年に21歳の若さで夭折した。【文献】『近藤孝太郎とその周囲　版画を中心として』展図録（岡崎市美術館　1983）／『創作版画誌の系譜』（加治）

武内桂舟（たけうち・けいしゅう） *1861～1943*

明治期に活躍した挿絵画家。日本画作品もあるが主に挿絵が多数を占める。明治後半期には文芸雑誌（主に『文芸倶楽部』）や、単行本（春陽堂、博文館など）での「口絵（彩色木版）」美人画での第一人者となる。文久元（1861）年11月3日に江戸赤坂の紀州藩邸に生れる。父は紀州藩士武内半介、母みせの次男。本名鋲平（しんぺい）。はじめ（幼少時）狩野永悳の養子となり「敬信」の号を受けるも、兄の早逝のために生家にかえる。幕府瓦解後は生活に困り内務省出仕、輸出陶器絵描きとして生計を得る。尾崎紅葉の硯友社の同人となって文芸誌『都の花』、『文庫』に挿絵を描く。明治二十年代中頃からの新聞（『中央新聞』『読売新聞』等）、雑誌の挿絵で活動した。雑誌では春陽堂の文芸誌『新小説』、あるいは博文館挿絵主任となっての『太陽』『文芸倶楽部』『少年世界』等で活躍。さらに明治30年代の『読売新聞』連載小説・紅葉著「金色夜叉」での挿絵好評で全国的に知られ名を高めた。また巌谷小波との挿絵を通じてのお伽噺界でも知られる存在であった。1908（明治41）年には国画玉成会評議員として参加。大正期以降は肉筆画に専念し老後を過ごした。ちなみに、『此花』第二枝（雅俗文庫　1910.2）には、「師門　月岡芳年／俗称　武内鋲（ママ）平／年齢　五十（文久元年生）／生地　江戸／現在　東京市麹町区四番町一番地」とある。芳年門とはいっても名ばかりで、実質的には独学で模写に励み、菊地容斉『前賢故実』（武者等歴史画）、松本楓湖『幼学綱要』の挿絵の影響を受けている。一時期松本楓湖の安雅堂画塾に学んだ。小林清親、尾形月耕など同様に、この期特有の先輩、同輩が互いに切磋琢磨し、情報を伝えあい、和・漢・洋の画の学びに徹する雰囲気が桂舟の挿絵を時代好みのものとした。明治30年代には富岡永洗・水野年方と明治挿絵界の三大家と評された。この3人の内で最も長生きであった。1943（昭和18）年1月3日九段の自宅で肺炎のため逝去。享年83。法名は硯精院釋桂舟居士。墓は中野区上高田・浄土真宗正見寺にある。【文献】「物故作家及美術関係者（昭和十八年版）」『日本美術年鑑』昭和十九・二十・二十一年版（国立博物館　1949）／岩切信一郎「武内桂舟晩年の資料から」『一寸』31（2007.8）／山田奈々子『武内桂舟口絵集』（文生書院　2013）（岩切）

竹内鴻村（たけうち・こうそん）➡竹内杢平（たけうち・もくへい）

竹内三郎（たけうち・さぶろう）

愛知県半田町の教員仲間による版画団体・版刀会が発行した版画誌『運』第5号〔1931〕にあざみを描いた木版画（題名不詳）と石垣の風景を描いた木版画（題名不詳）、第6号〔1931〕には植物を描いた3枚の木版画（題名不詳）を発表。現在『運』は5～7・10号（1931～1935）のみを確認。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

竹内俊一（たけうち・しゅんいち）

福岡県北九州生まれか。1917（大正6）年、「竹内俊一木刻画会九州東京の風景版画」（申込所　筑前八幡西浜町四丁目竹内其会）を企画（地方美術界 小倉便り『中央美術』3-9、1917年9月）。1924（大正13）年11月発行の版画誌『詩と版画』8輯（発行者：旭正秀）に、「竹之内俊一」の名でキュビスム的様式の木版画《裸体》を掲載、その後も同名で同版画誌の第10輯（1925.3）に詩「秋蛍」、第13輯（1925.8）に詩「赤い風船玉」を寄せた。また同じ1920年代前半に、詩人の佐藤八郎を発行者として、《芽生》《友達》《窃盗》《裸体》の4点の作品を収めた竹内俊一自刻木版画雑誌『かたまり』（発行所 市外西巣鴨堀ノ内123／ちつちやいの社）を刊行した。収録作品は、1920年10月にD.ブルリュークとV.パリモフが開催した「日本に於ける最初のロシア画展覧会」出品の、P.リュバルスキーによる版画集『娼婦』に収録のリノカットに共通する、内面性と社会性が溶け合う退廃的イメージを表わした作品である。この版画集に、「サトウハチロー」が「俊ちやんのこと」と題して、以下の挨拶文を寄せている（全文掲載。／は段落）。「俊ちやんを私が知つたのは二三年前でした。けれどそのころは丁度私の遊蕩時代でしたので、ほんとうに話をすることも出来ず、ずる〳〵べつたりに今日まで、俊ちやんをどうすることも出来なかつたのはすいぶん俊ちやんにもごめんなさいを言はなければなりません。／人が畑ちがひの中で暮らす。それはほんとうに可哀さうなことです。俊ちやんはそれでした。／俊しやんはとう〳〵私といつしよに暮らす様になりました。私はよろこんでゐます。俊ちやんも毎日うれしさうです。／少し白樺流になりますが、俊ちやんはいゝ人です。すてきなんです。まだほんのねんねですが、よくなる人なんです。／俊ちやんの暮らしをでんぐりかへす始めのお祝ひとして此の版画集を出します」。文中で言及されている「畑ちがひの中で暮らす」とは、この時期に竹之内俊一の芸名で浅草オペラの俳優として活動していたことを指すと推定。小野忠重はその頃、浅草オペラの小屋「金龍館」を訪ね、竹内が木版画を彫る様子を見たという（『近代日本の版画』）。当時竹内は、サトウハチローのほか1926年5月にアナーキズム詩誌『太平洋詩人』を創刊した渡辺渡ら、「ペラゴロ」と親しく交流した。その縁だと思われるが、『太平洋詩人』創刊に際して、太平洋詩人協会印刷部の第二部（図書、雑誌、装丁、図案、意匠、文化建築設計、飾窓装飾が業務内容）の担当者として、矢橋公麿と渡辺渡とともにその筆頭に名前を連ねている。関東大震災後の1925年頃に関西に移り住んで映画監督となり、1925年から1933年にかけて数多くの映画を監督した（インターネットにアップされている文化庁「日本映画情報システム」で検索可能）。その後の消息は不明。【文献】小野忠重『近代日本の版画』（三彩社　1971）／『創作版画誌の系譜』（滝沢）

竹内栖鳳（たけうち・せいほう） *1864 ～ 1942*

元治元（1864）年11月22日京都に生まれる。本名は恒吉。幸野楳嶺に学び、「棲鳳」と号す。1885年京都でのフェノロサの美術講演を聞き、影響を受ける。1892年京都市美術工芸展に《猫児負喧》（現存せず）を出品し、「鵺〔ぬえ〕派」とも評されるが、京都において日本画の革新をめざす。1900（明治33）年8月パリ万博視察のために渡欧。短期間ながら西洋美術に触れ、翌1901年2月帰国。雅号を「栖鳳」と改める。1907年第1回文展から帝展・新文展を通して審査員を務め、京都市立絵画専門学校で後進の指導にあたる。また画塾「竹杖会」を主宰し、上村松園・西山翠嶂・西村五雲・土田麦僊・小野竹喬・村上華岳・池田遥邨ら多くの逸材を育て、国画創作協会発足の後ろ盾にもなった。「東の大観、西の栖鳳」と並び称され、1937年大観とともに第1回文化勲章を受章。1942（昭和17）年8月23日神奈川県湯河原で逝去した。1924年制作の《斑猫》が重要文化財指定となる。

1986年京都市美術館において開催された『特別展　京都の近代版画－円山応挙から現代まで－』を担当した原田平作は、「開催にあたって」（『京都市美術館ニュース』147　1986.11）で、「考慮しておかなければならなかったことは、例えば竹内栖鳳の《日稼》（大正6年、第11回文展出品）のように、精巧な版画があるにはあっても（京都市美術館蔵）、作者が初めから版画を意図して制作していなかった作品、これをどう考えたらよいかという問題であったが、これを含めると大変な数になりそうなので、今回は割愛することにした。それで栖鳳を初めとする大部分の日本画家は省かれることになってしまったわけであるが、再び栖鳳を例にしても、当初から版画を意図して出来上がった作品もなかったわけではない。本来ならこうした作品は入れるべきであったろう」と述べている。その《日稼》であるが、栖鳳の数少ない美人画の一つで、1917年の第11回文展出品後は遺作展・回顧展にも行方知れずで、2013年の『竹内栖鳳展　近代日本画の巨人』（京都市美術館）で再び展示され話題となった。この間《日稼》の配色は当時制作された彩色縮小木版画の《日稼》（41 × 17.1cm　『竹内栖鳳』（光村推古書院　2013）などでは「1917年作」となっている）によってしか知ることができず、2013年まではこの木版画が本画の代用として参照されてきたとされる。栖鳳は京都便利堂の二代目中村弥左衛門と、年代は明確ではないが、大正の頃に、百部限定で《アレ夕立に》などの木版画集の刊行を企画（おそらくこの企画の中に《日稼》も含まれていたと推測）、順次栖鳳から原画を受け取りながら版の制作を進めたが、栖鳳の長男竹内逸三（筆名「竹内逸」、美術評論家・小説家・随筆家）が海外の留学から戻ると企画を中止するように進言（理由は不明）、企画は頓挫し、制作途上の作品は便利堂に残された。その後昭和30年代以降に便利堂と竹内逸三との話し合いで、作品集の一部はバラ売りで販売されることになり、現在、便利堂には見本の《アレ夕立に》（画寸凡そ43 × 63cm、日本画の上部、扇子で隠した舞妓の顔の部分を木版画にしたもの）1枚が残されている。当時の関係者の記憶では、「作品集は表紙・裏表紙に秋田杉の板を使い、金箔を散りばめ、彫刻師がタイトルを彫ったとても手の込んだものだった」とのことであるが、資料がほとんど残っていないため、企画した新作木版画集がどのようなものであったのかは不明である。また栖鳳は芸艸堂からも多くの版画作品を出版している。代表的なものに『西鳳逸品集』第1期・第2期（1937・1942）がある。同版画集は「竹内栖鳳先生自選画集」と銘打ち、第1期（木版と玻璃版（コロタイプ）の併用、「大和版印刷」と呼称）、第2期（栖鳳の希望により全部を木版で制作）ともに各10輯（各輯3図で全60図）制作された。発刊の辞には、芸艸堂より栖鳳への自選作の依頼に対して、「画伯興臻〔いた〕れば、進んで本集の為に揮毫せんと約さる」とある。残念ながら戦災で東京にあった版木の一部は消失したといわれるが、詳細は確認できていない。その他の一枚摺としては《牛の図》《鼠遊戯の図》《犬の図》《さゞれ石の宮》《田家烟の図》（何れも大奉書版　1901頃）などがあり、『棲鳳十二富士』（1冊12面　1894）、『栖鳳画譜』（全8巻〔第1巻1899、第7巻1912、第8巻は刊年未確認〕）、『栖鳳習画帖』（全4冊　1901）など多数の木版画帖（譜）〔コロタイプ併用もある〕を出版。さらに大判の木版画集『支那風光図絵』（大塚稔〔大塚巧藝社〕　1936　全12図限定150部）などが知られる。【文献】「京都便利堂六代目社長・石黒豊次覚え書」（1983）／『芸艸堂目録』1901・1909・1921・1928・1942／「栖鳳逸品集　第二期発行に就いて」『美術タイムス』40（出版社及び刊年は未確認）／平野重光責任編集『竹内栖鳳』（光村推古書院　2013）／『竹内栖鳳展　近代日本画の巨人』図録（京都市美術館　2013）（樋口）

竹内多門（たけうち・たもん）

長野県安曇野地方の小学校教師たちは、版画家として活躍していた郷里の先輩教師武田新太郎を顧問に迎えて「黄樹社」を組織し、版画誌『黄樹』（1937 ～ 1938）を発行した。第1号（1937.3）・第2号（1938.5）掲載の会員名簿に記載されているものの、版画の発表はない。1937年は北安曇野郡松川小学校に勤務し、1938年には北安曇野郡会染小学校に転任している。【文献】『黄樹』1·2（加治）

竹内馬春（たけうち・ばしゅん）

武藤完一は、大分県師範学校で開催された第2回版画講習会（1933年）を契機に、それまで大分で発行していた版画誌『彫りと摺り』（1931-1933）を九州全土に広めるために『九州版画』（1933 ～ 1941）と改題。その第14号（1937.4）に《大分港内》、第15号（1937.7）に《あひる》、第16号（1937.10）に《静物》、第17号（1938.5）に表紙絵《渓》を発表。以降作品の発表はないが、第24号（1941.12）の会員名簿（1941.11）では、所属が愛媛県今治中学校となっている。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

竹内英雄（たけうち・ひでお）

長野県出身か。1929（昭和4）年東京美術学校西洋画科に入学。1934年同校油画科を卒業。平塚運一は同校の臨時版画研究室（1935設置）で竹内を教えたというが（「東京美術学校版画教室の創立」『版画の国日本』）、その経緯は不明。同級生の佐々木孔（1936.4 ～ 1944.4　臨時版画教室助手）と同様に研究科に進んでいたのかもしれない。1936年の第11回国画会展に木版画《裸》が入選。入選時は東京市荏原区神明町37に住む。また、同年の第5回日本版画協会展にも《裸》が入選したほか、1938年1月の『エッチング』第63号に木版による《賀状》の図版が掲載された。版画に関するその他の活動は不明であるが、1939年と1941年には東京美術学校の臨時嘱託となり、海洋画に関する資料調査に従事。1939年の調査では練習船日本丸に乗っている。【文献】平塚運一「東京美術学校版画教室の創立」『版画の国日本』（阿部出版　1993）／『東

京芸術大学百年史　東京美術学校篇　第三巻』（ぎょうせい　1997）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『エッチング』63（三木）

竹内杢平（たけうち・もくへい） *1903～没年不明*

1903（明治36）年、愛知県額田郡常磐村田口（現・岡崎市田口町）に生まれる。本名は錦十郎。雅号は主に「杢平」を版画に、「鴻村」や「淳三」を短歌などに用いている。竹内喜久一は弟。岡崎師範附属小学校高等科を卒業し、家業の石材業に従事する。1924年からは石切り場のあった額田郡豊富村夏山の寺野をはじめ、宮崎村・形埜村へと転居し、終戦前には田口に戻る。当時の岡崎では西洋画への関心が高まり、1925年に近藤孝太郎・杉山新樹・山本鍬太郎らが洋画の研究会「我々の会」を結成し、1926年には展覧会を開催する。近藤から影響を受けた村松隆次・小野英一・村松ふさは版画同人誌『版画』（1925）を発行。第3号からは文芸同人誌『草原』と合併し、『試作』（1925-1926）として創刊する。竹内は詩歌や短文に長けており、『草原』では鴻村の名で和歌を詠み、戦後は俳句に転じている。版画は弟喜久一からの影響で制作を始め、『試作』には創刊号から参加し、版画や短歌を発表。創刊号（1925.6）には「杢平」と「淳三」の名で短歌を、第1年2号（1925.8）は「杢平」で短歌、「鴻村」で木版画《田口村風景》、「錦十郎」の名で「きつえんしつ」に小文を発表。第1年3号（1925.12）からは「杢平」の名で木版画《太陽》、「鴻村」で短歌を発表し、第2年1号（1926.2）には「杢平」で木版画《野の落日》と短歌、第2年3号（1926.7）に「杢平」で木版画《豊富村風景》を発表する。このように本名や幾種類もの雅号を用いていることについて、近藤孝太郎から竹内は近来どうかしていると言われていたようである。因みに同人録では創刊号は「鴻村」、第1年2号では「錦十郎」、第2年2号では「杢平」を使用している。また、《豊富村風景》については村松隆次が「南画と共通した味をもって居る。（中略）少し刀の扱い方を整理してはどうか。」（『試作』2-3）と助言している。【文献】近藤千之助「きつえんしつ」『試作』1（1925.6）／『近藤孝太郎とその周囲－版画を中心として』展図録（岡崎市美術館　1983）／桃山将「『試作』のことども－版画誌の誕生－」『古本屋の蘊蓄－店主たちの書物談義－』（燃焼社　1997）／『創作版画誌の系譜』（加治）

武内善紀（たけうち・よしのり）

長野県安曇野地方の小学校教師たちは、版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎えて黄樹社を組織し、版画誌『黄樹』（1937～1938）を発行した。武内は『黄樹』第1号（1937.3）の会員名簿に記載されているものの、版画の発表はない。当時、南安曇野郡穂高小学校に勤務。なお、第2号（1938.5）の会員名簿には「武田善紀」と記されているが、同一人と考え、「武内善紀」名の方を採用した。【文献】『黄樹』1・2（加治）

竹雄（たけお）

東京神田で発行された版画同人誌『艸と風』第1輯（刊年不明）に《ニコライ堂》《LOVE SCENE》、第2輯（1931.3）に《人魚》《東京駅》《自画像》、第3輯（1931.7）エキス・リブリス号に《エキス・リブリス》4点を発表。目次等に苗字の記載はない。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

竹尾啓二郎（たけお・けいじろう）

愛知県半田町の教師仲間による版画団体・版刀会が発行した版画誌『運』第10号〔1935〕に《郊外》を発表。現在、『運』は5～7･10号（1931～1935）のみを確認。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

竹腰健造（たけごし・けんぞう） *1888～1981*

1888（明治21）年6月25日石川県金沢に生まれる。旧姓は岩村。父高俊は当時金沢県知事の要職にあった。美術批評家岩村透は実兄。1897年養子縁組により、竹腰姓となる。1906年福岡県立豊津中学校を、1909年第一高等学校を卒業。東京帝国大学工科大学建築科に進み、1912年同校を卒業。1913年英国に留学。ロンドンではアーキテクチャル・アソシエーション・スクールで学び、1915年ローヤル・インスティテュート・オブ・ブリティッシュ・アーキテクツ（ＲＩＢＡ）の建築士試験に合格。アソシエート（準会員）の資格を得て、オースチン建築事務所に勤務した。一方で、その頃からチェルシー美術学校のエッチング教室の夜間部に通うようになり、フランク・エマニュエルの指導を受けた。同じころ同校に学んでいた武藤武造は、「エッチングの教室等も其頃は生徒が皆無で建築家の竹越健三〔竹腰健造〕氏が機械と教室を専有して居たので、煙草をふかしに其処へ行つた事もある」（「英国に於ける私の学校生活」（『アトリヱ』4－3）と証言している。その後、エマニュエルの勧めでリバプールの美術館で開かれた銅版画展に出品し、入選。ロンドンの画商が作品を扱うようになり、画家としてロンドン永住も勧められたというが、建築家としての道を選び、1917年3月に帰国。5月から住友総本店建築部に勤務した。なお、帰国に際し、友人に出品を依頼していた銅版画3点のうち《San Gimignano〔サン・ジミニャーノの曙〕》が、同年のロイヤル・アカデミー展に入選している。翌1918年に実施された明治天皇聖徳記念絵画館の懸賞設計に応募し、三等に当選。また、同年6月の山本鼎・織田一磨・戸張孤雁・寺崎武雄による「日本創作版画協会」の創立には、やや後れて参加（11月頃か）するも、発起人に遇されている。1919年の第1回展に《チャールス一世の像》〔チャールズ王雪中像〕《サン・ピエートロ寺》《ピカデリー》《礼拝堂入口》《バス寺》《ウルビノ》《ベニス》《ピター―ポロー寺の入口》《土木田神殿》《収獲〔or 収穫〕の後》《ソマセットのハウス》《ヴィテルポ》の12点を出品。第1回展の大阪展には目録では11点を出品しているが、目録を詳細に検討すると欠番が1点あるので、東京展と同じ12点だった可能性も高い。また、同年のロイヤル・アカデミー展（竹腰は前年の1918年とするが、出品年は『Royal Academy Exhibitors 1905－1970 Volume Ⅳ』（Hilmarton Manor Press 1987）によった）に《King Charles' statue in snow〔チャールズ王雪中像〕》が入選した。1920年の日本創作版画協会第2回展に《水車小屋》《横堀川》《漁村》《海近き里》《大物》《土佐堀川》の6点、第2回展の大阪展では《大物》を《閃光（鳴尾）》に代えて6点を出品。1921年の第9回国民美術協会展に《白い壁》、日本創作版画協会第3回展にも《白い壁》《岩ケ鼻》《上鳴尾A》《上鳴尾B》《橋際》の5点を出品したが、本業の建築の仕事が多忙となり、これが最後の出品となった。建築家としては、1922年に住友合資会社の技師となり、大阪・北浜の住友ビルディングの建設に従事。1933年には長谷部鋭吉と「長谷部・竹腰建築事務所」を設立。1944年には再び住友本社に戻り、同事務所を住友土地工務株式会社と合併し、専務取締役社長に就任。1945年には住友土地工務株式会社を改組し、日本建設産業株式会

社（現・住友商事株式会社）とし、取締役社長に就任するも、1947年公職追放（～1950）となり退任。その後、大阪市中央図書館（1961）などの建築に携わり、関西電力本社・新住友ビル・大阪市新市庁舎などの建築顧問を務めた。また、1946年日本建築協会会長（～1957）、1965年全国建築審査会協議会会長（～1977）などを歴任。1975年黄綬褒章受章、1960年日本建築学会名誉会員。1961年大阪府芸術賞受賞。1962年日本芸術院賞受賞。1971年には勲三等瑞宝章を授与された。1981（昭和56）年7月28日大阪市の大阪大学病院で逝去。自宅は兵庫県西宮市松園町。自著に『雅俗九十年』（リーチ　1979）、『幽泉自叙』（創元社　1980）がある。【文献】竹腰健造『幽泉自叙』（創元社　1980）／『Royal Academy Exhibitors 1905－1970 Volume Ⅳ』（Hilmarton Manor Press 1987）／『日本美術年鑑』昭和57年版（東京国立文化財研究所1984）／拙編「〔資料〕日本創作版画協会展総出品目録」『和歌山県立近代美術館紀要　第2号』（和歌山県立近代美術館　1997）／拙稿「日本創作版画協会の結成とその活動」『近代日本画の諸相』（中央公論美術出版　1998）（三木）

※訂正：拙稿「日本創作版画協会の結成とその活動」の註記13（ｐ315）で、竹腰のロイヤル・アカデミー展への出品年を「大正六・九年」としていますが、「大正六・八年」の誤りです。この場を借りて、訂正し、お詫び申し上げます。

竹下金鳥（たけした・きんちょう）

京都の図案画家。戦前から戦後にかけて内田美術書肆より『光琳風虫くらべ』（1928　全3冊）、『年中行事遊楽図』（1932　1）、『応用小品　落葉垣　乾』（1934）、『名残名月ももちくさ』（1935　全2冊）、『千波万波』（1935　全2冊）や金鳥・模『琳派百華譜』（刊年不明　木版6図）などの木版図案集、その他に木版画『遊楽絵四図』（内田美術書肆　刊年不明）の制作がある。【文献】『全日本木版画展覧会』目録（全日本木版画協会　1949.4.12-17　於日本橋三越本店）（樋口）

武田郁郎（たけだ・いくお）

1936（昭和11）年の第5回日本版画協会展に木版画《内海》《讃岐風景》を出品。出品時は愛媛県に住む。【文献】『第五回展出品目録』（日本版画協会　1936）（三木）

武田貞之（たけだ・さだゆき）

愛知県の中学校に教員として勤める傍ら、1936（昭和11）年の第5回日本版画協会展に木版画《朝日山公園》《風景》が初入選。その後も第6回展（1937）に《郊外》《釣堀風景》、第7回展（1938）に《仙人掌風景》《飛騨路》が連続して入選した。第7回展の入選作について、美術評論家で浮世絵研究家であった鈴木仁一は、「「仙人掌風景」では、前面に大きく仙人掌を拉し来りはるか遠景を見すかせ、「飛弾〔騨〕路」おいては、屈曲する大きな街道をはさんだ田畑のたゝずまい、この作者あるひは芸術写真の作家ではないかと思はせる程、新鮮な視解〔アングル〕から構図を纏めてゐる。同じ墨一色でも、逸見〔享〕氏のやうな詩情は画面のどこにもなく、突きはなしたやうに整備された漆黒の画面である。油絵具を用ひたせいか彫線のふちに黄色く滲みが出て、それが反つて遠見には立体的な深味をもたせてゐるやうだ。何げなしに置かれたやうな雲塊の表現にも、描線の使ひわけ、白〔ホワイト〕を入れて効果を弱めてゐるなど画面の隅々まで心使ひおさおさ怠りなく、洵に好感のもてる佳品であつた」（「版画協会展を鑑る（上）―新協展、新日本百景など―」『浮世繪界』4－2　1939.2）と評している。また、1937年の第24回光風会展にも《名城風景》（目録では「第7室（水彩）」の部屋に並んでいるが、木版画であったことは武藤完一旧蔵の絵葉書で判明する）が入選している。なお、1941年には大分の武藤完一が主宰する版画誌『九州版画』第24号（1941.2）の会員名簿に名を連ねているが発表はしなかったようである。この頃、愛知県立津島中学校に勤務。1943年には日本版画奉公会会員になっている。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／鈴木仁一「版画協会展を鑑る（上）―新協展、新日本百景など―」『浮世繪界』4－2　1939.2）／『第85回記念光風会目録集』（1999）／『九州版画』24（1941.12）／『創作版画誌の系譜』（三木）

武田三郎（たけだ・さぶろう） *1915～1981*

1915年（大正4）年12月13日香川県多度津町に生まれる。1928年多度津中学校に入学。中学時代、兄武田淳より木版画道具を買い与えられ、版画制作を始める。1934年法政大学経済学部予科に入学。大学在学中、平塚運一・畦地梅太郎に師事。1936年第5回日本版画協会展に木版画《青島風景》《佐久の秋》《大池》が初入選。翌1937年の第6回展にも《関温泉の雪》が入選した。1938年法政大学を卒業し、日本軽金属株式会社に入社。1943年木版画集『四國の山』第1輯を自刊。時期は不明であるが応召され、宇和島で終戦。戦後は、多度津を拠点に活動を再開。以後、『四國の山』第2輯・第3輯（1947）、第4輯（1950）を出版。1948年前川千帆を講師に招き、高松で版画講習会を開く。1949年から再び公募に出品するようになり、第23回国画会展に《火伏せの道》、第17回日本版画協会展に《島のある風景》《けしの花》が入選。翌1950年の第18回日本版画協会展にも《風景》《笹峯》《水門》が入選し、会友に推挙された。その後、第26回国画会展（1952）、第19・20・22回日本版画協会展（1951・1952・1954）に出品する。一方で、1955年からは「日本板画院」（1952設立）に出品するようになり、同年の第5回展に《老樹》が入選。1956年日本版画協会を退会する。1957年日本板画院院友、1961年会員に推挙。日本板画院展には第30回展（1980）まで出品を続けた。『板画新日本百景』（共同出版　1964）に《道後温泉》《足摺岬》の制作や、郷里にあっては、広報誌『まるがめ』と『たどつ』の表紙絵を担当し、『まるがめ』は1974年から1981年まで、『たどつ』は1975年から1979年まで、それぞれ自作の木版画で飾った。1981年香川県からの委嘱で《本山寺》を制作する。武田は、郷土の風物や四国の山々をこよなく愛し、《石鎚山の朝》《高松旧駅》《塩屋別院》《御東御殿》などの代表作に加え、丸亀城、多度津の風景、身近な草花、郷土玩具などをモチーフにした数多くの佳作を残す。1981年讃岐版の会を結成し、会長となり版画の普及発展を目指した。同（昭和56）年11月6日、香川県丸亀市の病院で逝去。自宅は仲多度郡多度津町東浜。【文献】『武田三郎木版画集　1937～1981』（讃岐版の会1996）（尾形）

武田信吉（たけだ・しんきち）

1920年代後半には朝鮮でも創作版画の気運が次第に高まり、1929年多田毅三・佐藤貞一らが中心になって「朝鮮創作版画会」が結成される。翌1930年には朝鮮における官設の美術展覧会「朝鮮美術展覧会」の第9回展（5.18

～ 6.7）で初めて版画が出品受理され、その後は毎回 1，2 点と少数ながらも版画の入選が続き、第 20 回展（1941）で田中浩吉（《家》（エッチング）とともに、武田信吉（全州）も木版画《瓦家》で入選を果たす。その頃仁川にいた佐藤米次郎は、『エッチング』102 号（1931.7）に「第二十回鮮展を見て」を寄稿し、「鮮展にも版画がありましたエッチングでは田中浩吉（清津）の『家』、木版では武田信吉（全州）『瓦屋根の家』二點である。木版は印刷用黒インキで朝鮮紙に刷った一色ものである。エッチングは四六判大の作品だった。右批評は差控へますから悪しからず。半島の版画はこれからだ・・・と云う事を附言するに止めたい」と記している。【文献】辻（川瀬）千春「植民地期朝鮮における創作版画の展開―「朝鮮創作版画会」の活動を中心に―」『名古屋大学博物館報告』30（2015）／『エッチング』102（樋口）

武田新太郎（たけだ・しんたろう） *1886 ～ 1957*

1886（明治 19）年長野県北安曇郡に生まれる。長野県師範学校在学中に日本水彩画研究所の講習会に参加し、また長野市で開催された太平洋画会の展覧会に感銘を受けて絵に道を定める。1913 年東京美術学校図画師範科卒業、教職につく。奈良県師範学校で教えていた大正期中頃戸張孤雁と会い、その著書『創作版画と版画の作り方』にふれて版画を始め、同時に授業での版画教育を始める。1924 年京都市二条高等女学校に移り、京都図画教育家協会の後身である紫明会に参加。1925 年 6 月、神戸版画の家の山口久吉とともに『HANGA 児童作品集』を刊行。1927 年 3 月、児童作品を主とする全国版画作品展覧会が大阪・朝日会館で開催された際には中心的な役割を果たした。自作では 1928 年第 9 回帝展に木版画《木陰》で初入選、以後第 10 回展・14 回展でも入選。1928 年 12 月、平塚運一を講師に迎えて京都の山本画箋堂で開催された版画講習会に出席（推定）、それを機に翌年結成された「京都創作版画会」に加わり、第 1 回～ 3 回展に出品、メンバーによる《京都五十景》の頒布にも参加した。1929 年第 9 回日本創作版画協会展に《木場》と《比叡の朝霧》で初入選、1931 年の第 1 回日本版画協会展には会友として出品、2 回展以降は会員として、第 6 回展をのぞき第 10 回展まで連続出品した。1932 年の第 3 回京都工芸美術展入選（「版画特賞」受賞か）、同年の第 1 回関西創作版画展出品、やはり同年の第 10 回国際オリンピック芸術競技への出品、1934 年のパリにおける「日本現代版画とその源流展」への出品など活躍が続いた。さらに同年の日本図画手工協会主催「第 1 回『郷土を描く』展覧会」に出品。また同年の大礼記念京都美術館美術展覧会、これに続く 1935 年の第 1 回京都市美術展に入選し、以後第 8 回展まで出品。1937 年にパリにおける国際美術教育会議出席のため渡欧を計画、版画頒布による後援会が発足し、5 月に「武田新太郎渡欧展」を開催、6 月渡欧し 9 月下旬帰国した。その間、参加した創作版画誌には、『HANGA』第 16 輯（1930.4）、『きつつき』3 号（1931.6）、『版藝術』9 号（1932.12）、同 10 号（1933.1）、『櫟』4 輯（1934.11）、同 5 輯（1935.4）、同 7 輯（1935.8）、同 12 輯（1937）などがある。1933 年 8 月には自ら前田藤四郎や北村今三らと大阪で『黄楊』を創刊、表紙と《虎杖》を手がけた（ただし創刊号のみ確認）。また 1937 年 7 月に長野で創刊された小学校教師による『黄樹』では顧問となって創刊号（1937.3）に表紙と《雪景〔賀状〕》を、2 号（1938.5）に表紙を寄せている。また、1939 年には新日本百景《夏之保津峡》を制作した。戦後も京都版画協会に会員として参加、同会が刊行した『版画集 京名所』に《廣澤の池》を寄せ、1951 年 12 月の第 1 回展にも出品している。作家活動と並行して長く京都の教育界にあって版画教育を続け、京都市視学委員も務めた。1957（昭和 32）年逝去。【文献】武田新太郎「私の歩いた道」『エッチング』103（1941.8）／岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『資料館紀要』12（京都府立総合資料館 1984）／『特別展 京都の近代版画－円山応挙から現代まで－』（京都市美術館＋朝日新聞社　1986）／『創作版画誌の系譜』（西山）

武田健夫（たけだ・たけお） *1913 ～ 2013*

1913（大正 2）年 6 月 18 日東京市に生まれる。旧姓は鈴木。旧制高等学校 2 年生だった 1932 年、たまたま書店で入手した『新版画』第 1 号（6．20 発行）の感想文を小野忠重に送ったことをきっかけに、小野との交友が始まり、9 月になり「新版画集団」（同年 4 月結成）に参加。10 月の第 1 回展に《機関庫　スケッチ》《案内人の話（白岩小屋にて）》を出品。以後、高等学校・大学（東京帝国大学経済学部）での学業と両立させながら、第 2 回展（1933.3）に《ラグビー》、岐阜展（1933.7）に《機関庫》《ラグビー》《築地河岸》《下田河口》《山小屋》、第 3 回展（1933.11）に《街はずれの鉄工所》《耕作》《工事場》、小品展（1934.4）に《ラグビー》《機関庫》、第 4 回展（1934.6）に《青果市場》《魚河岸》《あらそひ》《風景》、第 1 回版画アンデパンダン展（1934.6）に《坑夫長屋》、江戸風景版画展（1934.7）に《明治神宮外苑》《築地本願寺》、小品展（1935.5）に《札幌裏街》《丸ノ内の或裏通り》《「夜の宿」》、現代版画展（1935.5）に《機関庫》《ラグビー》、第 6 回展（1936.10）に《人物》を出品。また、機関誌である『新版画』には、第 5 号（1932.10）に《築地河岸》、第 7 号（1933.1）に《楽屋の一隅》、第 9 号（1933.6）に《下田河口》、第 10 号（1933.10）に《定期船を待つ（北国の漁港で）》、第 12 号（1934.4）に《或る舞台》、第 14 号（1934.11）に《山小屋の夜》を発表した。この間、1933 年の第 3 回日本版画協会展に《街はずれの鉄工所》、1935 年の第 4 回展に《魚河岸》が入選している。1936 年東京帝国大学経済学部を卒業し、日本興業銀行に就職。その後は、銀行勤務の傍ら、翌 1937 年の第 6 回日本版画協会展に《蒼生苦》、1941 年の第 5 回造型版画展に《出勤時（東京駅）》を出品。1942 年には夫婦養子縁組により、「武田姓」となった。戦後は、日本版画協会展に 1952 年の第 20 回展から再び出品するようになり、1960 年の第 28 回展まで連続して出品。その間、1954 年には会友となった。また、春陽会展へも 1952 年の第 29 回から出品を始め、1961 年には版画部会員となっている。なお、就職先であった日本興業銀行では常務、その後は小野田セメント副社長などを歴任した。2013（平成 25）年 7 月 1 日東京都武蔵野市で逝去。【文献】「武田健夫自筆メモ」（和歌山県立近代美術館蔵）／武田健夫「新版画集団・回想」『版ニュース』4（輝開　1998.7）／『新版画集団第一回展覧会目録』（1932）～『新版画集団第六回展覧会目録』（1936）／『造型版画協会第五回展目録』（1941）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『創作版画誌の系譜』（三木）

武田善紀（たけだ・よしのり）➡武内善紀（たけうち・よしのり）

武田由平（たけだ・よしへい） *1892 ～ 1989*

1892（明治 25）年 7 月 5 日岐阜県大野郡灘村（現・高

山市）に生まれる。本名は由兵衛（よしひょうえ）。1914年岐阜県師範学校を卒業し、高山男子尋常高等小学校に赴任。その後いくつかの小学校へ転任。もとは中村姓だが、1918年頃武田乃ぶと結婚し、1920年の長男誕生を機に武田姓となる。幼時より版の絵に関心を持ち『現代の洋画』で自刻自摺の木版画にふれ興味を抱いたというが、1920年夏、上田市に山本鼎が開設した農民美術練習所を訪れて感銘を受けたことが転機となり、以後図画の授業に版画をとりいれる（これが飛騨における版画教育の始まりとされる）。学校文集や同窓会誌にも版画を掲載した。自身の制作欲も高まり、1925年には太平洋画会研究所の夏期講習会を受講、同じ頃川端絵画研究所洋画部にも学んでいる。1928年、岐阜出身の武藤完一らが大分市で創刊した版画誌『木版』に《壺》で参加、翌年武藤に勧められて中津に移り、旧制中津中学校の図画教員となった。1931年8月大分県師範学校で開催された版画講習会に参加、講師であった平塚運一の指導を受け、これをきっかけに本格的な作家活動を始める。同年の第1回日本版画協会展に《雑草》《とうもろこし》が入選、以後出品を続けたほか（第6回展より会員）、春陽会展で第10回～13回展に連続入選、国画会展でも第12回展および第16～19回展に入選。1936年の文展鑑査展、翌年と翌々年の新文展でも入選を果し、1940年の奉祝美術展にも出品している。その間の1932年、新版画集団に参加して第2回～6回展に出品、『新版画』第9号に《秋》を、同第14号に《お盆》を寄せたほか、1935年夏には郷里高山で同集団による創作版画展（高山町公会堂）を開催し、自ら講師となって版画講習会も主催した。他の版画誌への登場も数多く、大分ではすでにふれた『木版』第1～3号、『彫りと摺り』第1～3、6、8号、『九州版画』第1～3号に参加、地元中津でも既述した版画講習会を契機に1931年版画誌『空巣』を創刊して翌年にかけて4号を残し、やはり同地で1934年に創刊された『鳩笛』でも中心人物となって第1・2輯に参加している。さらに全国の版画誌にも手を広げて『版画研究』『版芸術』『陸奥駒』『版ゑ』『きつつき版画集』などに作を残している。重厚な色彩による牧歌的な風景や豪快な草花を持ち味とした。戦後は日展に発表の場を求め、1960年に日版会の創立委員となって長く出品を続けた日本版画協会を退会、日版会および白日会を拠点に版業を重ねた。一方大分では、1946年に「大分県美術協会」創立、1953年に「中津美術協会」設立、1961年には武藤完一と「大分県版画協会」を立ち上げるなど美術や版画の普及に尽し、また長年教職にあって版画教育に取り組み、多くの弟子を育てた功績も大きい。1989（平成元）年4月9日中津市で逝去。【文献】武田由平「私の生ひたち」『エッチング』95号（1940.11）／『武田由平版画集』（武田由平版画集刊行会　1975）／『飛騨の今昔－明治以降の新展開－』（岐阜県美術館　2000）／池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（大分県立芸術会館　2002.9）／『武田由平展』図録（岐阜県美術館　2007）／石末順子「武田由平と飛騨の教育版画」『研究事業報告 平成18年度版』（岐阜県教育委員会＋岐阜県ミュージアムひだ　2007）／『創作版画誌の系譜』（西山）

竹之内俊一（たけのうち・しゅんいち）

➡竹内俊一（たけうち・しゅんいち）

竹久夢二（たけひさ・ゆめじ） *1884～1934*

1884（明治17）年9月16日岡山県邑久郡本庄村（現・瀬戸内市邑久町本庄）に生まれる。本名茂次郎。幼時より絵を好む。1901年上京し、1905年早稲田実業学校本科を卒業。コマ絵から画業を始め、同年6月荒畑寒村に紹介されて『直言』第2巻第2号に初のコマ絵を発表。『光』や『日刊平民新聞』にも参加する。並行して一般誌へも投稿、『直言』デビューと同年同月の『中学世界』に《筒井筒》が第一賞として掲載されたのを皮切りに『ハガキ文学』や『中学世界』でも採用され、まもなく投稿家時代を終えて『ホトトギス』や『女学世界』『文章世界』など各誌から依頼されるようになり、かつてない柔らかな筆致や感傷的なムード、自己告白的な内容が注目を集める。1909年、既発表のコマ絵を再編した『夢二画集 春の巻』（洛陽堂）が大ヒット、以後『夏の巻』『花の巻』『旅の巻』『秋の巻』『冬の巻』など同スタイルでの刊行を続け、とりわけ妻たまきをモデルとした「夢二式美人」が若い男女の心を掴んで一世を風靡した。印刷物を介して大衆と接する新たな作家像を提示し、コマ絵のような木版による小さな絵を「草画」と呼んで絵画の一分野と捉えたのも画期的である。1912年京都府立図書館で第1回夢二作品展覧会を開催。この時期続いた個展に多く肉筆画を並べたことからわかるように本画も手がけ画壇への意識もあり、1913年には第2回光風会展に《かへらぬ日》《岬へ》《隅田川》《薄暮》を出品・入選させてもいるが、以後は在野の立場を貫き、画会と印刷物を主な舞台に活動した。

自刻自摺は親しい人への絵葉書に試みたにすぎないが、残した版の仕事は夥しく、今日木版画として扱われるものでは洛陽堂から1911年に刊行した『櫻さく國 白風の巻』の口絵《あきつ》、1912年に刊行した『櫻さく國 紅桃の巻』の口絵《得度の日》、1913年に白羊社書店から伊上凡骨の彫りで（あるいは摺りもか）出版した《春の宵》《夜の歌》が早い。1914年日本橋区呉服町に開店した港屋絵草紙店では港屋版として一枚摺の《港屋絵草紙店》《文楽人形》《新富座当り狂言》《小春》《治兵衛》《治兵衛のマスク》《一座の花形》《風景（ちょうちん）》を版行したほか（石版画《風景画（川岸）》も同時出版）、千代紙や便箋、半襟、手拭など自身の図案による木版製品を多数展開した。港屋は1916年頃閉じるが、版木は大阪の柳屋に譲られて柳屋版として継続した。柳屋は便箋や封筒などの新作も出版、1920年には京都の清文堂に制作を依頼して大型の《宝船》も版行している（《夏の女》《黒猫を抱く女》も柳屋版と推定される）。夢二の木版製品を手がけた版元にはほかに榛原、さくら屋、つくし屋、いせ辰が知られる。木版への関わりは港屋・柳屋時代が最盛といえるが、1916年から手がけたセノオ楽譜の装幀（平版・木版）、1924年に始まる『婦人グラフ』の表紙や挿画（木版機械摺）も良質な仕事といえよう。また明治期末以来夥しい数の自著や他著の装幀を手がけ、多くに精美な木版を用いたことも特筆すべきであるし、1930年の《雛による展覧会》や1931年の《竹久夢生展覧会》といったポスター（いずれも石版）でも冴えた構成を見せ、晩年に至るまで魅力的な摺物を世に送り続けたといえる。田中恭吉や恩地孝四郎、藤森静雄ら、夢二に心酔した若者たちに版画への道を拓いた功績も大きい。1934（昭和9）年9月1日長野県諏訪郡富士見町の富士見高原療養所で逝去。【文献】『竹久夢二とその周辺』（和歌山県立近代美術館・宮城県美術館　1988）／『夢二 1884-1934 アヴァンギャルドとしての抒情』（町田市立国際版画美術館　2001）／『竹久夢二展－描くことが生きること－』（千葉市美術館・夢二郷土美術館・和歌山県立近代美術館　2007）／『京都国立近

代美術館 所蔵作品目録Ⅸ 川西英コレクション』（京都国立近代美術館　2011）（西山）

竹村温次郎（たけむら・あつじろう）

小野忠重らが主宰する新版画集団の機関誌『新版画』第2号（1932.7）に《カットグラス》、第3号（1932.8）に《メリーちゃん》、第4号（1932.9）に《新宿街　東京夜曲B》、第5号（1932.10）に《スワン》を発表。作品はいずれも木版画であった。【文献】『創作版画誌の系譜』（樋口）

竹村節之助（たけむら・せつのすけ）

1928（昭和3）年、秋山喜久三・杉原董三と竹村の3人は甲府で版画と文芸の研究雑誌『線　SEN』（全5冊）を発行する。『線　SEN』は自画自刻の版画や自作の詩などの発表のほかに、ジャン・コクトーの詩、ルノワール論など、文学と美術の融合を念頭において内容を構成し、アポリネールの詩の訳に添えてデュッフィの絵を版画に起こすことなども行った。秋山と杉原は文章部分も担当したが、竹村は文学部分には関わらず、版画のみを手がけている。第1巻1号（1928.7）に《扉〔絵〕》《六朝時代の瓶絵》《洋風館》《阪道》と「線の言葉」、第1巻2号（1928.10）に《扉絵「バット」》《静物》《喘ぎ》、第2巻3号（1929.4）に《冬日風景》《窓際静物》とブランス・マセリ作《太陽を追ふもの（1）》の復刻木版2点、第3巻4号（1930.1）には《静物》《病院の見ゆる風景》と《太陽を追ふもの（2）》の復刻木版2点を発表する。竹村はこの『線　SEN』に参加したことについて、「私達のグループの諸兄は皆何かと芸術に生きてゐる。そして私はただそれを羨ましく思い眺めてゐる。然るに或る時杉原兄は私に手紙を寄せて画でも習ったらと云ってくれた。だが私は到底駄目であると考へてゐた。そしてその後又版画をやってはどうかと進めてくれた。」と「線の言葉」（『線　SEN』1-1）に書いている。その後、最終号となった 第4巻5号（1931.1）の「編者の頁」には「創刊号から手を握り合って来た同人竹村君は自ら信ずるところあって離れてゐった。」とあり、退会したことが記されている。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

竹村猛児（たけむら・たけじ）

小児科医（開業医）、小説及び随筆作家。著書に自作版画（自刻木版）を挿絵として使用。活動期は昭和10年代から戦後。1944（昭和19）年に新古典美術協会を脱会、新日本美術協会を組織し展覧会開催。千葉県（成田中学と推定）の同窓会「二一会」会誌『壯丁』〔「非売品」で本文ガリ版（孔版）印刷〕を1935年に発行し、その編集兼発行人に「竹村猛壽」（大島仁と共に）とある。「猛壽」が本名で「猛児」はペンネームの可能性がある。なお名前の読みについても確認がとれず、一応、一般的使用呼称で示した。この会誌の発行所名に「東京市赤坂区青山南町五ノ二十一　竹村小児科医院」とあって本人の住所と判断され小児科医開業であったことが判る。さらにこの会誌の会員消息にある履歴の要点を示すと「大正十一年四月慈恵会医大入学、昭和三年三月卒業、昭和六年迄東京慈恵会医大附属東京病院小児科勤務、後現住所に開業」とある。趣味として「絵画・彫刻・木版・九ミリ半活動写真・美術工芸・骨董品・能・ラグビー・小説・創作・釣・旅行・小鳥」と挙げ、多趣味であった。事実、『新青年』に小説を投稿し1940年5月号に「三人の日記」、翌1941年8月号に「盲腸炎の患者」が掲載となった。アマチュア映像作品として1936年に「鉤を失った山彦」、1938年に「蜘蛛と頼光」を残している。挿絵としての版画掲載は、「竹村猛壽」名で、会誌『壯丁』（表紙題字号数も木版で同氏）の1935年8月第1巻第1号に《境内》（墨摺）、同年10月第1巻第2号に《三つの霊に送る》（墨摺）、1936年12月第2巻第2号に《河原》（緑単色摺）や（掌編小説的な医療奇談集）『診療簿から拾つた話』（自装本・診療社　1937）にセピア摺単色版画12点、巻頭肖像・扉・カット等墨摺と多くの版画が挿入されている。また、『脈』（大隣社　1939）、『往診鞄』（大元社　1940）、『物言はぬ聴診器』（大元社　1941）、『温度表の汚染』（大元社 1941）、『人生聴診』（杏文書院　1941）、『診察室の屑籠』（大元社　1942）、『或る医者の話』（京橋書房　1947）等の随筆集を刊行し主に装幀は著者自装。霊気療法に関心を寄せた『婆やの霊気』（1940）の著もあるとのこと（未確認）。この他にも創作版画に関心を寄せて、風景・人物・抽象等の小品版画（主に木版と推定）を制作しているが年譜と共に全貌は明らかになっていない。【文献】岩切信一郎「竹村猛児－或る小児科医の版画－」『一寸』6（2001.4）（岩切）

竹村利雄（たけむら・としお） *1901 ～ 1984*

1901（明治34）年6月25日、石川県金沢市に生まれる。1907年、一家で京都に転居。1914年、京都市美術専門学校に入学。父の死により2年で中退。以後衣料図案を生業とする。この頃から短歌に興味を持ち、1924年に『国民文学』に入社。半田良平に師事する。1947年、植松寿樹主宰『沃野』の創刊に参画。京都歌人協会委員、委員長を歴任。第一歌集『未来花』（1959）、第二歌集『開裂集』（1961）を上梓。1984（昭和59）年7月31日逝去。版画関係では、東京の料治熊太が主宰する版画誌『版芸術』の年賀状募集に応募し、選外佳作として入選。作品が第12号（1933.3）に掲載されている。【文献】『始祖鳥　竹村利雄遺作歌集』（竹村チイノ〔自家出版〕1986）／樋口良一編『版画家名覧』（山田書店版画部　1984）（加治）

竹村好人（たけむら・よしと）

長野県安曇地方の小学校教師たちは、版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎え、版画技術の研磨と会員の親睦をはかるために「黄樹社」を組織し、版画誌『黄樹』（1937 ～ 1938）を発行する。その第1号（1937.3）に《静物》を発表。1937年当時、北安曇野郡池田小学校に勤務。第2号（1938.5）には作品の発表はないが、会員名簿によると所属は諏訪郡高島小学校となっている。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

田坂　乾（たさか・けん） *1905 ～ 1997*

1905（明治38）年東京麹町に生まれる。本名は乾吉郎。文化学院で石井柏亭や有島生馬・山下新太郎に学ぶ。在学中の1925年、同期の村井正誠が中心となった同人誌『シェル・パントル』に参加、第3号の扉、第4号の《木版》、第6号の《表紙》《仲通りの景》《裏街》《窓》をいずれも木版で手がける。1928年大学部美術科の第一回卒業生となり、卒業制作《M・M像》で同年の第15回二科展に初入選。1929年頃西田武雄にエッチングを学ぶ。1931年中国の上海、杭州に滞在。同年6月上海で内山完造を発起人に太田貢との二人展を開催、油絵の他日本で制作した銅版画12点を出品。初日に来場した魯迅が銅版画1点を購入したという。1935年第4回日本版画協会展に石版画《庭》《婦人像》が初入選、以後第12回展（1943）まで石

版画を出品。第5回展で会員に推挙され、第8回展には木版画を出品したと見られる。日本版画協会には数少ない石版画家として活動したが1946年に同会を退会、1938年より出品・入選していた一水会に拠点をしぼり、戦後は専ら風景をモティーフに油彩・水彩画家として活躍した。妻ゆたかは石井柏亭の四女である。1997（平成9）年9月5日東京都品川区大井で逝去。【文献】『光と影のポエジー 日本近代銅版画展』（西宮市大谷記念美術館　1982）／『一水会史』第1巻（一水会　1983）／『田坂乾画集』（田坂乾画集刊行会　1992）／田坂乾「－江南追憶－魯迅先生・黄瀛君のこと」『東京南部文学ネットワーク誌 わが町あれこれ』12号（1996.12）／「訃報 田坂乾さん逝く」同15・16合併号（1997.12）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前編』（東京文化財研究所 2006）（西山）

田崎迪之（たざき・みちゆき）

長野県須坂の版画同人誌『櫟』第11輯（1936.11）に《猫》を発表する。『櫟』（1933～1937）は小林朝治が1933年に平塚運一を講師に招いて開催した「版画及び図画講習会」（会場：須坂小学校）を契機に「信濃創作版画研究会」を立ち上げて創刊したもの。【文献】『須坂版画美術館収蔵品目録2　版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集」』（須坂版画美術館　1999）／『創作版画誌の系譜』（加治）

田嶋豊次郎（たじま・とよじろう）

兵庫県で発行された西日本新版画創作普及協会の機関誌『西日本新版画』第2年1輯（1937.3）に《唐の山水》を発表。現在『西日本新版画』（1936～1938）は1-2・2-1・2-2・3-2の4冊を確認している。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

田代暁舟（たしろ・ぎょうしゅう） *1878～没年不詳*

武内桂舟門人の挿絵画家。信州生まれの東京育ちとされるが詳細はわかっていない。1878（明治11）年生まれで、本名は英虎。上京後、柳沢文真及び武内桂舟に学ぶ。『文芸倶楽部』（博文館）、『新小説』（春陽堂）の挿絵を描く。単行本口絵は、1901年村井弦齋『日出島　曙の巻』（春陽堂）、1902年福地桜知『赤穂浪士』（勝山堂）、内田魯庵『霜くずれ　怨慈悲』（春陽堂）、1907年伊藤銀月『嶋の美少年』（春陽堂）などに描いている。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』（文生書院　2005.12）（岩切）

田代古崖（たしろ・こがい） *1882～1936*

1882（明治15）年6月25日、東京大森に生まれる。本名は常次郎。13歳の頃に梶田半古の画塾に入門。1898年から日本絵画共進会と日本美術院との連合絵画共進会に出品し受賞を重ね、1914年より文展・帝展・再興院展などに出品する。1936（昭和11）年8月26日東京で逝去。版画は赤穂義士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』（義士会出版　1921）に《一黨の引揚》1図や児童雑誌『少年界』（金港堂書店）に石版挿絵の制作などがある。【文献】『山田書店新収美術目録』81（2008）／『20世紀物故日本画事典』（美術年鑑社　1998）（樋口）

田代修一（たしろ・しゅういち）

1932年、教員の文部省検定試験に合格し、図画・国語・地理などの教師として1936～42年までを新潟県立柏崎商業学校に、1943～46年までは新潟県立長岡中学校に勤務した。当時、日本エッチング研究所の西田武雄はエッチング普及のため、毎年夏休みを利用して教師や生徒にエッチング講習会を行った。1938年8月8日は新潟県刈羽郡柏崎町においても柏崎町有志のエッチング講習会（講師：西田武雄　小野忠重ほか　会場：柏崎小学校　参加者：9名）が開かれ、柏崎商業学校の教師であった田代も参加。講習会で制作した柏崎のねまり地蔵尊堂を描いた作品が研究所機関誌『エッチング』第71号（1938.9）に掲載されている。日本版画奉公会会員（『日本版画』123 1943.4）【文献】「夏期エッチング講習会決定表」『エッチング』69（1938.7）／桑山太市「講習をうけて」『エッチング』70（1938.8）／粕川一雄「始めてエッチングを知って」『エッチング』71（1938.9）／金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究報告書 第1部　直轄学校～三重県』（金子一夫　2016）（加治）

田城義光（たしろ・よしみつ）

1931年8月大分県師範学校で開催された版画教育講習会（3～7　講師：平塚運一）に参加し、版画制作を始める（大分師範学校第3回夏期図画実技講習会）。武藤完一は、この講習会を機に版画誌『彫りと摺り』（1931～1933）を創刊。田城は大分県中津市からこの講習会に参加し、制作した作品《松と海》が『彫りと摺り』第1号（1931.9）に掲載されている。一方、田城ら中津市からこの講習会に参加した同宿の者10人は地元に帰り、親睦と版画技術向上のために、版画同人誌『空巣』（1931～1932）を発行。その第1号（1931）に《風景》、第2号（1931.12）に《国東名所》、第3号（1932.9）に《姫島風景》を発表。その後、1933年8月には平塚運一の2回目となる版画講習会（大分師範学校第5回夏期図画実技講習会）が開催され、それを機に『彫りと摺り』は『九州版画』（1933～1941）と改題される。その第8号（1935.10）に《鰯釜のある風景》を発表。この号は1935年8月1-5日に開催された講習会（大分師範学校第7回夏期図画実技講習会　講師：平塚運一）の記念号でもあり、作品掲載から、田城も参加したと考えられる。その前年には大分師範学校第6回夏期図画実技講習会として行われたエッチングの講習会（講師：西田武雄 1934.8.1～5　参加者32名）にも参加し、エッチング技法を学んでいる（『エッチング』22　1934.8）。1934年当時、大分県富来小学校（現・国東市立）に勤務。【文献】「創作版画講習会其他版画展等」『郷土図画』（1-5 1931.10）／池田隆代「大分県における創作版画誌」（『大分県立芸術会館研究紀要』1号　2002.9）／武藤隼人『版画家・武藤完一資料集（戦前篇Ⅰ）－作家年譜を中心にして－』（武藤隼人　2010）／『創作版画誌の系譜』（加治）

多田北烏（ただ・ほくう） *1889-1948*

1889（明治21）年長野県松本市に生まれる。本名は嘉寿計（かすけ）。1902（明治35）年上京し日本画を学ぶ。1909年頃東京高等工業学校工業図案科選科に学び、1915（大正4）年頃から製版印刷・凸版印刷・共同印刷などの印刷図案の仕事を手がける。1922年、現在の東京都北区滝野川の300坪におよぶ敷地に「サン・スタジオ」を設立、自宅兼アトリエとした。以後ポスターや雑誌の表紙などを制作するグラフィックデザイナーとして活躍した。1926年4月には「商業美術家協会」の設立に参加している。また、サン・スタジオを拠点に後進の育成に取組み、デザイン教育者としても大きな功績を残した。1948（昭和23）年1月1日疎開先の沼津市で逝去。版画との関連では、1928年8月に「実用版画美術協会」を結成したこ

とがあげられる。この協会は「大衆のための美術」を提唱して図案家14名、印刷技術者19名によって結成された商業美術関係者の団体で、印刷図案における絵画性と印刷技術の有機的結合を目指して活動を展開した。団体名に使われた版画という用語は、印刷図案における絵画性の代弁という意味を持っていた。1929年12月の第1回展から1936年3月頃開催の「創作雛乃試作展」まで小規模展を含めて全16回の展覧会を開催し、ほかに小冊子『実用版画美術』の発行、広告美術の講習会や広告劇の上演などを実施した。北烏をはじめとして、この協会の会員らがいわゆる版画の制作へと実際に向かったわけではなかったが、同人らが目指した造形の地平は、1922年に来日したワルワーラ・ブブノワがその直後に日本に紹介し、自らも実践に移したロシア構成主義の造形理念である「印刷版画」（＝「ヴェシチ」）を商業美術の側が応用・展開したという観点から考えることが可能で、版画との関連は重要である。さらに、「大衆」を意識した活動を展開している点は、「版画の大衆化」を提唱して1932年に小野忠重らが結成した「新版画集団」の運動とも共鳴し、北烏らの活動は少なからず版画史上でも視野に入れなければならない動向としてある。【文献】『多田北烏とその仕事展』図録（宇都宮美術館　2004）（滝沢）

多田瑞穂（ただ・みずほ）

1933（昭和8）年東京美術学校彫刻科木彫部に入学。1937年には臨時版画教室エッチング部（田辺至・松田義之指導）でも学んだが作品は不明。彫刻家としては同年の第1回新文展に《踊子静立》が初入選。翌1938年同校を卒業。同年の第2回新文展に《憩》、1939年の第3回展にも《芳潤》が入選。また、戦後も日展に出品し、1949年の第5回展、1952年の第8回展、1954年の第10回展に入選している。1972年頃は東京都豊島区要町に住む。【文献】『エッチング』57／『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇　第三巻』（ぎょうせい　1997）／『〔日展史資料Ⅰ〕文展・帝展・新文展・日展　全出品目録　明治四十年－昭和三十二年』（社団法人日展　1990）／『同窓生名簿　東京美術学校　東京芸術大学美術学部　東京芸術大学大学院美術研究科』（同窓会名簿編集委員会　1972）（三木）

田近政二（たぢか・まさじ）

富山県に生まれる。号は「東岳」。1926年東京美術学校彫刻科木彫部本科に入学。彫刻を学ぶ傍ら、彫刻科木彫部の先輩である森大造・村井辰夫らが校友会活動として始めた版画部にも参加。目録が判明しているものだけであるが、1928年2月の「椎ノ樹第1回創作版画展」に《羅漢》《田端所見》《風景》、6月の第3回展に《看板のある風景》《駅の玄関》《巣鴨風景》、1930年11月の展覧会にも《無題》《REVUE》《丸子多摩川園》を出品。また、1929年1月の第9回日本創作版画協会展にも《風景》が入選した。一方、彫刻家としての活動は、在学中の1930年第2回聖徳太子奉讃展に《浴女》が入選。翌1931年東京美術学校を卒業。そのまま東京に住み、同年の第8回白日会展に《胸像》、第18回二科展に《女ノ首》、第12回帝展に《花園ぞ薫る》、翌1932年の第13回帝展に《かどで》がそれぞれ入選。また、1933年には、1927年から1931年までの東京美術学校彫刻科木彫部の卒業生有志で結成された「九元社」にも参加した。その後、帰郷。1942年の第5回新文展に《神威》が入選しているが、富山県からの出品であった。以後の活動は不明であるが、1970年頃は富山県高岡市に住んでいた。【文献】『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇　第三巻』（ぎょうせい　1997）／『〔東京美術学校〕校友会月報』26－8、27－3、29－7／伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春創作版画の名品』図録（和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館　2010）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　2002）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『資生堂ギャラリー七十五年史　一九一九～一九九四』（求龍堂　1995）（三木）

橘　小夢（たちばな・さゆめ） *1892～1970*

1892（明治25）年10月12日秋田市西根小屋町（現・秋田市中通）の生まれ。本名加藤熙（ひろし）。生来体が弱く、幼時より絵草紙や錦絵に親しみ、また好んで絵を描く。1908年上京、麹町に住み川端画学校や巽画会東京本部研究会で日本画を修める。白馬会研究所でも洋画を学んだとされる。1915年頃から『淑女画報』や『女学世界』に夢二調のコマ絵や表紙絵を寄せ、1917年からは『新脚本叢書』や『綺堂脚本十種』（ともに平和出版社）の木版装幀を手がける。ビアズレーら世紀末芸術への共鳴から次第に妖美な造形に転じ、伝奇的な説話や物語に取材して死と官能の交錯する、極端に長身痩躯な人物を配した独自の構成を展開、自ら「優奇世絵」と名付けた。1923年三栄社より初の画集『さゆめ選画集』を刊行（凸版）。1926年『大衆文芸』誌上で矢田挿雲「江戸から東京へ」の挿画を手がけて好評を得、その名を知られるようになる。以後出版界と支援者への肉筆画を主な舞台に活動を続けた。

大正末頃池袋の自宅を「夜華異相画房」と称して画集や版画の出版を計画。1932年に神田三省堂で個展開催、発表したプロセス版《水魔》は発禁となるも、この頃から一枚物の刊行が続く。夜華異相画房からの刊行と考えられるものに《唐人お吉》（木版 1933年）、《澤村田之助》（木版 1934年 山岸主計刀）、《お蝶夫人》（木版 1934年）、《嫉妬》（凸版 1934年『さゆめ選画集』の再版か）、《刺青》（同）、『牡丹灯籠画譜』（凸版9点 1934年）、《中村もしほ》（木版 1935年）、《やよいひばり》（木版 1935年 山岸主計刀）がある。ほかに日本版画製作社を版元とするシリーズ《小夜福子》《葦原邦子》《津坂オリエ》《水の江瀧子》（いずれも木版 1935年頃）が知られる。

1933年から36年まで毎年個展「優奇世絵展覧会」を開催、35年の第4回は西川満との親交から台湾日日新報社で行われた。西川が発行した雑誌『媽祖』の第5冊（1935.7）に《毒草》を、第11冊（1936.9）に《牡丹》を寄せてもいる。妖艶な作風から戦中は制作が難しく、また戦後は病がちとなって出版界からも遠ざかり、次第に世から忘れられたが、近年再評価が進んでいる。1970（昭和45）年10月6日東京都豊島区池袋で逝去。【文献】楢崎宗重「小夢情緒」『浮世絵芸術』4巻11号（1935.11）／『橘小夢展－耽美なる幻想』（弥生美術館・橘小夢会　1993）／『華宵会会報 大正ロマン』8号（高畠華宵大正ロマン館　1996.8）／『橘小夢画集 日本の妖美』（河出書房新社　2015）／『橘小夢 幻の画家 謎の生涯を解く』（河出書房新社　2015）／奈良香「幻の画家・橘小夢とふるさと秋田」『秋田美術』51号（秋田県立近代美術館　2015.3）（西山）

橘　繁雄（たちばな・しげお）

長野県西筑摩郡福島に生まれる。長野県師範学校二部2

年に在学中、同校生徒による版画誌『樹氷』第3号（1941）に《無題》2点と《眠れる男》を発表。1941年同校を卒業。【文献】『樹氷』3／『卒業生名簿　昭和25年』（信州大学教育学部本校　1950）（加治）

立花　壽（たちばな・ひさし）

東京の料治熊太が発行した版画誌『版芸術』第57号（1936.12）台湾土俗玩具集の編輯と図案の作成、解説を担当する。当時、立花は台湾の台北市に住み、郷土玩具の研究をしていた。料治は1930年に版画誌『白と黒』を創刊して以来、数多くの版画誌を出版。1932年には版画誌『版芸術』（1932～1936）を創刊し、郷土玩具を地方別の版画集にして紹介していく。台湾土俗玩具集では立花の図案を料治朝鳴（熊太）の彫りで20点の版画にした。料治の「あとがき」では「精緻な原画をいただいたのであるが、私の技極めて拙く、真を伝へることの出来なかった」としながらも「紹介されなかった台湾玩具集を一冊つくることの出来たことは立花氏の大きな功績である。（中略）これで、24冊、完全に玩具集を完成しました。」と喜びを記している。【文献】料治熊太「あとがき」『版芸術』57（1936）／『創作版画誌の系譜』（加治）

竜川末広（たつかわ・すえひろ）

愛知県半田町の教師仲間による版画団体・版刀会が発行した版画誌『運』第5号〔1931〕に灯台を描いた木版画（題名不詳）を発表。現在『運』は5～7・10号（1931～1935）のみを確認。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

龍野和成（たつの・かずなり）

長野県須坂では小林朝治が須坂小学校の眼科医となり、教師たちとの交流が生まれ、版画制作が広まる。1933（昭和8）年に平塚運一を講師に招いて「版画及び図画講習会」（会場：須坂小学校）を開催。その参加者たちと版画誌『櫟』（1933～1937）を発行。その第1輯（1933.8）に《柘榴》、第2輯（1934）に《賀状》を発表する。第3輯（1934.7）以降は会員名簿に掲載されているものの作品の発表はない。当時、上高井郡神科小学校に勤務。【文献】『須坂版画美術館　収蔵品目録2　版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集」』（須坂版画美術館　1999）／『創作版画誌の系譜』（加治）

伊達　信（だて・しん）

東京の料治熊太は版画誌『版芸術』全58号（1932～1936）を発行する。第9号（1932.12）「全日本版画家年賀状百人集」に風見鶏を描いた年賀状を発表。年賀状のサインに「S.DATE」とある。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

伊達　孝（だて・たかし）

1926（大正15）年に教員の文部省検定試験に合格し、1932年から1940年まで、図画の教師として福島県立会津中学校に勤務。1935年には肋膜炎を患い、健康に自信が持てなくなっていた時期に西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』（1932～1943）を知る。以前からエッチングには興味を持っており、研究所製プレス機を購入。油絵の筆をビュランに持ち替え、田辺至の講義録や西田の著書を参考に独学で試行錯誤を繰り返して、完成させたエッチング3点を西田に送った。そのうちの《風景》が『エッチング』第42号（1936.4）に掲載されている。これらの制作について、第41号（1936.3）に「エッチング一年生」として小文を寄稿。第42号の「研究所通信」には「会津の伊達孝氏も来訪されたが小生下阪中だったのでお目にかゝれなかった。」と西田の残念な気持ちが記されている。【文献】『エッチング』41・42／金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究報告書　第1部　直轄学校～三重県』（金子一夫　2016）（加治）

立石鐵臣（たていし・てつおみ） *1905～1980*

1905（明治38）年3月31日台湾総督府財務局事務官の父・立石義男の四男として台北に生まれる。父の内地転勤で8歳の時に帰国。東京五反田に住み、日野尋常高等小学校に転入。その後同校を卒業して、明治学院中学部に入学するが、1919年鎌倉に転居。1921年16歳で日本画家を志し、隣村の川端玉章の娘婿・跡見青瀾に師事し、「青玄」と号す。21歳で洋画に転じ、岸田劉生に師事。劉生没後は梅原龍三郎に師事して国画会に出品する。1931年・1932年に出品した各6点が入選し、2年連続で「国画奨励賞」を受賞、1933年会友となり、将来を嘱望される（1937年同人となる）。1934年7月、2度目の渡台で、7人の台湾人画家と共に日本人画家としてただ一人、在野の美術団体「台陽美術協会」設立に参加するが、出品は第1回展のみで退会（1939年に再度入会）。この頃に台湾日日新報社文芸記者の西川満と親交。西川が1934年9月に設立した「媽祖書房」発行の雑誌『媽祖』（第1冊～第16冊　限定300部　1934.10～1938.3）の表紙絵や各種限定本の装幀・挿画に関わり、西川の強い要請もあって木版画を制作するようになる。1935年5月西川主導の「台湾創作版画会」設立にも参加。同年6月『媽祖』第5冊（版画號）に《門（板橋林本源庭園）》《少女像》《女王牌》3点の木版画を発表、木版制作についての短文を寄せる。1936年3月帰国直前に、台北の大阪朝日支局ビルで「告別立石鐵臣洋画展」を開催しており、「油彩画・版画合わせて38点」を発表する（出品した版画の詳細は確認できていない）。1939年3度目の渡台では、台北帝国大学理農学部嘱託として標本画に従事し、精妙微細な標本図に魅せられ、細密技法の修得に励む。1941年7月台湾の民族資料の蒐集・記録を目的に発行された雑誌『民俗台湾』（1945年1月まで43号を刊行）の編集に参画し、同誌に台湾の古い街並や風俗をスケッチした画文『台湾民族図絵』を連載、表紙絵も含め木版画で制作し、台湾の一般読者から好評を得る（掲載された立石の版画、『台湾民族図絵』45点と表紙絵35点は、1986年台湾の向陽により『台灣民族図繪』として1冊にまとめられ、1988年洛城出版社から刊行された、未見）。終戦後も台北で美術教師や医学部・編訳館の技士などとして2年間留用後、1948年最終引揚船で帰国する。翌1949年より再び国画会展に出品。1950年香月泰男・宇治山哲平・須田剋太らと「型生派美術協会」を結成し幻想的な作品などを発表するが、第2回展を以って退会、その後は台湾時代に修得した細密画の技法を活かして、1969年から11年間「美学校」（東京・神田）で細密画講師として「細密画」を教え、昆虫や魚の図鑑類の仕事に携りながら、油彩による静寂な細密画作品を晩年まで国画会展に発表し続けた。次男立石雅夫と共著で『細密画描法－細密画の学び方、展開、系譜』（美術出版社　1978）などの著作がある。1980（昭和55）年4月9日逝去。【文献】西山純子「華麗島の創作版画－一九三〇年代・台湾－」『千葉市美術館研究紀要　採

蓮』7（2004.3）／『立石鐵臣展－生誕110周年－』図録（泰明画廊　2015）／『麗しき故郷「台湾」に捧ぐ－立石鐵臣展』図録（府中市美術館　2016）（樋口）

竪谷三夫（たてや・みつお）

長野県上水内郡小田切に生まれる。長野県師範学校一部2年に在学中、同校生徒による版画誌『樹氷』第3号（1941）に《池畔》を発表。1944年同校を卒業。1950年当時は九州に在住。【文献】『樹氷』3／『卒業生名簿　昭和25年』（信州大学教育学部本校　1950）（加治）

田中章夫（たなか・あきお）

京都創作版画会第2回展（会期不明　1930～1932の間に開催か）に《静物》《円筒形の家》《普請場》を出品。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12（1984）（三木）

田中勇雄（たなか・いさお）

長崎の郷土を愛する詩人や版画家たちは、長崎報知新聞に連載された田川憲の版画に共感し、「版画長崎の会」を設立し、版画・文芸同人誌『詩と版画』（1934）を発行する。第2号より『詩と版画』を『版画長崎』（1934-1935）と改題し、巻号を継承。編集に加わっていた田中は、この改題にあたり、第2号の「編輯余言」に「版画に依って長崎を表現したい私達の念願は詩を歌を句を謡を捨石としてすらよいとさえ思ってゐる。」と記している。創刊時には詩歌組と版画組とのグループ分けがあり、田中は詩歌組に所属。その田中に「詩を歌を句を謡を捨石として」と言わせたのは、版画への並々ならぬ思いがあったと思われる。しかし『詩と版画』第1輯（1934.2）に小文「KAPPA仏性図絵」、『版画長崎』第2輯（1934.4）に俳句、第3輯（1934.5）に短歌を発表しているが、第5輯（1935.8）で田中の原画を田川憲が彫ってカットとしているのみで、自画自刻の版画の発表はない。第5輯の「編輯余言」には「田中勇雄氏　最近蟄居。再起を切望す。」とあり。当時、下筑後町73に在住し、長崎市勝山小学校に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

田中　勇（たなか・いさむ）

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校（現・県立宇都宮高等学校）在学中、同校生徒が発行した版画誌『刀』第6輯（1929）に《煙突ノアル風景》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

田中岩次郎（たなか・いわじろう） *1893～1974*

1893（明治26）年東京市神田に生まれる。号は「里青」。名前には岩治郎・岩二郎の表記もある。1908年白馬会洋画研究所に入り、黒田清輝に学ぶ。1910年の第13回白馬会展に油彩画《朝の木立》《夕の海》《静物》を出品。白馬会解散後は、光風会に出品し、1912年の第1回展に油彩画《赤リボン》、1918年の第6回展に《静物》《暮行山村》が入選。翌1919年の第1回帝展にも《夜の自画像》が入選した。1923年関東大震災のため、大阪府茨木に移り、しばらく大阪の広告代理店「萬年社」に勤務。その後、東京に戻り、1927年の第4回白日展に《六月》を出品。1929年には個展（12.8～10　千代田ビル富士見軒）を開催した。版画は1941年2月に「里青」の名で発表した新版画《鎌倉　建長寺》（版元不明　図版は『版画堂〔目録〕』36所収）がある。1943年母親の実家のある三重県志摩郡浜島に疎開。多くの水彩画を描いた。戦後は浜島で中学校の教員として勤めたが、1951年鎌倉に移り、その後は東京の三軒茶屋・目黒などに転居。1974（昭和49）年福岡市で逝去した。【文献】堀晃『甦る画家たち―主として東海地方の』（中日新聞　2001）／『明治期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　1994）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　2002）／『白日会展総出品目録＜第1回～第59回＞』（白日会　1984）／昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所2006）／『版画堂〔目録〕』36（1998.3）（三木）

田中榮治（たなか・えいじ）

1943（昭和18）年の第12回日本版画協会展に木版画《蛙群》が入選。出品時は奈良に住む。【文献】『第十二回版画展目録』（日本版画協会　1943）（三木）

田中恭吉（たなか・きょうきち） *1892～1915*

1892（明治25）年4月9日和歌山市に生まれる。1908年作のスケッチには「紫」と署名がある。1910年和歌山県立徳義中学校を卒業するのと前後して上京、白馬会原町洋画研究所に入り、藤森静雄・大槻憲二・久本信男（久本DON）・田中二郎らと出会う。1911年東京美術学校予備科日本画科志望に入学。同年、藤森・大槻・田中二郎・久本と共に回覧雑誌『ホクト』を作る。ペンネームは「路草」。1912年2月久本を介して竹久夢二との交流が始まり、夢二主宰の雑誌『桜さく国　紅桃の巻』（3.21発行）に「田中未知草」として詩を発表。その頃から恩地孝四郎や香山小鳥との親交も始まっている。1912年10月第1回ヒユウザン会展覧会に油彩画《道化芝居》を出品。同年11月京都で開かれた第1回夢二作品展覧会の手伝いに恩地と共に夢二と同行。1913年雑誌『少年界』『少女界』（大洋社）に、絵と文を執筆。同年5月から藤森・大槻・田中二郎・河合清一と共に回覧雑誌『密室』を創刊。1914年3月発行の9号までメンバーを久本・土岡泉・池上澪標・恩地・池内三郎・三並花弟・清宮青鳥と増やしつつ、水彩画・ペン画・木版画・詩歌・小品文などを発表。田中は第1・2・6・7・9号の編集を担当し（第4号は所在不明）、第6号（1913.12.3発行）に香山小鳥の遺作となった木版画2点を紹介。程なく自身も木版画を始めた。最初期の作例としては、1913年12月13日付書簡で恩地に送った《赤き死の仮面》がある。『密室』7（1914.1.14発行）の表紙や欄画に自刻木版を用い、第8号（1914.2発行）では木版画《病める夕べ》《太陽と花》を発表。やがて藤森・恩地と共に洛陽堂から創刊した詩と版画の雑誌、公刊『月映』I（1914.9.18発行）にはそれらの版木を機械刷りにしたものが掲載された。その間、1913年10月に喀血、自らの死に直面しつつ始められた木版画は切迫感の漲る表現になった。公刊に先立ち、1914年4月から版画をたとうにまとめて田中・藤森・恩地の3人で持ち合う私輯『月映』が作られ、田中はII輯の作品を作った時点で療養のため帰郷するが、東京と和歌山で作品を送り合ってVI輯（1914.7発行）まで続けられた。ただし、田中は病状悪化のためV輯（1914.6発行）から新作を発表できず、田中の短歌を恩地が木版で摺ったものが収録された。田中から恩地や藤森に宛てた書簡が現存し、田中は『月映』の支柱的存在であったことが窺えるが、田中が公刊『月映』に発表できた新作はIII（1914.12.16発行）、VII（1915.11.1発行）に収録された3点だけで、その他は『密室』や私輯『月映』のために制作したものから恩地らが選んだものだっ

た。1915年6月に『月映』により作品を知った萩原朔太郎から第一詩集の装丁を依頼され、ペン画による装丁を引き受けて着手するも、1915（大正4）年10月23日和歌山市で逝去。その後改めて萩原から恩地に装丁が依頼され、1917年2月田中の遺作11点を収録した詩集『月に吠える』が刊行された。【文献】『田中恭吉作品集』（玲風書房　1997）／『田中恭吉展』図録（和歌山県立近代美術館・町田市立国際版画美術館・愛知県美術館・NHKきんきメディアプラン　2000）／『田中恭吉　ひそめるもの』（玲風書房　2012）／『月映』展図録（宇都宮美術館・和歌山県立近代美術館・愛知県美術館・東京ステーションギャラリー・NHKプラネット近畿　2014）

田中金二（たなか・きんじ）

1930（昭和5）年11月、東京美術学校校友会版画部が主催した展覧会〔「椎ノ樹創作版画展」〕に《大島風景》を出品。出品時は東京美術学校の生徒だったと思われるが、『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇　第三巻』（ぎょうせい　1997）などに記載はなく、詳細は不明。【文献】『〔東京美術学校〕校友会月報』29‐7（1931.1）（三木）

田中国次郎（たなか・くにじろう）

長野県須坂では小林朝治が須坂小学校の眼科医となり、教師たちとの交流が生まれ、版画制作が広まる。1933年に平塚運一を講師に招いて「版画及び図画講習会」（会場：須坂小学校）を開催。その参加者たちと版画誌『櫟』（1933～1937）を発行。その第1輯（1933.8）に《綿内風景》、第2輯（1934）に《賀状》、第3輯（1934.7）に《山》、第4輯（1934.11）に《高井橋》を発表する。その間の1934年8月19～22日には「第2回版画及び図画講習会」（講師：平塚運一　会場：須坂小学校）が開催され、田中も参加。その講習会を記念して『臥龍山風景版画集』（信濃創作版画研究会　1934）が出版され、《龍灯口》が掲載されている。当時、長野県上高井郡綿内小学校に勤務。【文献】『須坂版画美術館　収蔵品目録2　版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集」』（須坂版画美術館　1999）／『創作版画誌の系譜』（加治）

田中哇華（たなか・けいか）

1923（大正12）年頃に日本画家吉川観方らと京都で「洛陽版画協会」を結成し、新版画を制作。1921年の第7回大阪美術展に日本画《習作》を出品した「田中畦花」と同一人か。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12（1984）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　2002）（三木）

田中浩吉（たなか・こうきち）

1920年代後半には朝鮮でも創作版画の活動が次第に高まり、1929年多田毅三・佐藤貞一らが中心になって「朝鮮創作版画会」が結成される。翌1930年には朝鮮における官設の美術展覧会「朝鮮美術展覧会」の第9回展（.5.18～6.7）で初めて版画が出品受理され、その後は毎回1，2点と少点数ながらも版画の入選が続き、田中浩吉は第20回展（1941）でエッチング《家》、第21回（1942）で《武具》（版種不明）が入選するが、その頃の住所が「清津」その後が「咸鏡」であること以外、経歴は不明。なお、第21回展で田中とともに入選した佐藤米次郎は、『エッチング』102号（1931.7）に「第二十回鮮展を見て」を寄稿、「鮮展にも版画がありましたエッチングでは田中浩吉（清津）の『家』、木版では武田信吉（全州）『瓦屋根の家』二點である。木版は印刷用黒インキで朝鮮紙に刷った一色ものである。エッチングは四六判大の作品だった。右批評は差控へますから悪しからず。半島の版画はこれからだ・・・と云う事を附言するに止めたい」と記している。【文献】辻（川瀬）千春「植民地期朝鮮における創作版画の展開－「朝鮮創作版画会」の活動を中心に－」『名古屋大学博物館報告』30（2015）／『エッチング』102（樋口）

田中信五郎（たなか・しんごろう）

大阪で前田藤四郎や武田新太郎らが発行した版画同人誌『黄楊』（黄楊社発行）は創刊号が確認されている。その創刊号（1933.8）に《人物》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

田中　進（たなか・すすむ） *1905～1983？*

1905（明治38）年7月25日広島市段原に生まれる。1925年広島県広島師範学校を卒業。広島県内の小学校教諭として勤める傍ら、1929年の第4回1930年協会展に油彩画《校舎の一隅》が初入選。その後は白日会展に出品し、1931年の第8回展に油彩画《秋景》、1932年の第9回展に油彩画《秋風》、1933年の第10回展に水彩画《布と果物》が入選した。銅版画は、佐伯郡能美島の中村小学校に勤務していた1934年夏に、日本エッチング研究所製のエッチングプレス機を入手し、西田武雄の著書により独習。その成果の一端である《河岸》の図版は『エッチング』37号（1935.11）に紹介されている。1936年には西田武雄・武藤完一との直接の交友が始まり、指導も受けた。1937年の第6回日本版画協会展に銅版画《籔の細道》《黄昏》が初入選。その後も、第7回展（1938）に《高原》《崖と道》《藪の小路》、第8回展（1939）に木版画《竹林の崖》、第9回展（1940）に《枯林》、第10回展（1941）に《黎明の渓谷》、第11回展（1942）に《牧場》、第12回展（1943）に《安芸三段峡龍門》を連続して出品。1944年には会員に推挙され、同年の第13回展にも《湖畔1》《湖畔2》を出品した。その他の公募展としては。1939年から1941年の第一美術協会展（第11～13回展）に出品し、第13回展出品の《冬木立》で栗原奨励賞を受賞。1940年の紀元2600年奉祝展にも《孟宗竹林》が入選。また、同年（1940）12月に結成された「日本エッチング協会」の会員となり、第1回展に《竹藪》、第2回展（1941）に《風景》、第3回展（1942）に《風景》を出品している。この間、武藤完一の主宰する『九州版画』にも参加し、第19号（1939.6）に《春日田園》、第20号（1939.11）に《無題》、第21号（1940.6）に《田園》、第22号（1940.11）に《水郷》、第23号（1941.6）に《石門》、第24号（1941.12）に画《海》（木版画）を発表。1942年には最初の個展（1．9～11　広島・福屋）を開催した。同年教員を退職し、実業界に転じたが、同時期に広島県美術協会会員、翌1943年には日本版画奉公会会員となっている。戦後の活動については、その詳細は不明であるが、再び教職につき、アジア美術交友会などに所属して制作活動を続けたという。1983（昭和58）年か、広島で逝去。【文献】『白日会展総出品目録＜第1回～第59回＞』（白日会　1984）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　2002）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『今純三・和次郎とエッチング作家協会　採集する風景／銅版画と考現学の出会い』展図録（渋谷区立松濤美術館　2001）／『エッチング』22・37・42・47・55・64・66・

74・80・95・96／『創作版画誌の系譜』（三木）

田中浅一 (たなか・せんいち)

版木会が発行した創作版画集『版』第 10 集 (1937.10) に木版画 1 点を発表する。創作版画集『版』は愛知県第一師範学校（現・愛知教育大学教育学部の母体）関係の版画同好会の出版物と考えられる。【文献】『版』10 ／「第一師範学校（名古屋）及び附属学校に関係する資料」インターネット（加治）

＊訂正とお詫び：「版木会」については同誌に掲載されている校章「師」や版画の題材から愛知県知多郡師崎町（現・南知多町）の学校の版画同好会と考えてきましたが、愛知第一師範学校の関係出版物と判明したため、ここで訂正してお詫びいたします。

田中坦三（たなか・たんぞう） *1918 ～ 2011*

1918（大正 7）年 7 月 25 日愛媛県南宇和郡一本松町広見に生まれる。小学生のころから美術にひかれ、愛媛県立宇和島中学へ入学するも、途中で上京し、日本大学第三中学校へ転校。1936 年からは小林萬吾の主宰する同舟舎洋画研究所へも通った。1937 年帝国美術学校彫刻科に入学。翌 1938 年油絵科に移り、同郷の畦地梅太郎に誘われ、第 13 回国画会展に木版画《深川風景》を出品。出品時の住所は「東京市渋谷区千駄谷四ノ六九三（平安荘畦地気付）」とある。また、同年の第 7 回日本版画協会展にも木版画《顔Ａ》《顔Ｂ》《四国の海》が入選。これらの作品について、美術評論家で浮世絵研究家の鈴木仁一は、「新制作派あたりの造型感覚に著しい影響を受けてゐるらしい作家で、おつとりした在来の創作版画の画風に対して、なにか激しい現代知性の苦悶といつたものを感じさせる。病的に蒼ざめた女人の顔、そこに不思議な美を享受する人は享受するであらうし、一眼見るなり顔をそむける人もあるだらう。それはともかく、この画は場中の異色として人目を欹たしめるが、この人作家としては未知数のやうで、例之、人物画の場合、顔面の描写に念を入れ過ぎてか、着衣の部分で急に力抜けしたり、風景「四国の海」にアングルの面白さはあつても観照の不足を露出したりして居る」（「版画協会展を鑑る（上）―新協展、新日本百景など―」『浮世繪界』4 － 2　1939.2）と評している。1939 年には帝国美術学校の学生によるグループ「絵画」の第 3 回展に油彩画《作品》5 点を出品。抽象の作品だったという。1942 年 10 月応召され（洲之内徹はこの時に繰り上げ卒業をしたとするが、帝国美術学校校友会が 1943 年 2 月にまとめた『会員名簿』には名前はない）、丸亀の西部第三十二部隊に入隊。戦後は郷里に戻り、1949 年の第 18 回日本版画協会展に《みのり》《顔》が入選したが、以後の出品歴はない。その後、1952 年の第 2 回モダンアート展に彫刻《作品》3 点を出品。翌 1953 年会友に推挙され、1958 年まで所属。その後は公募団体展に出品せず、個展を中心に、木や石を素材にした現代彫刻や絵画を発表。1966 年から 1970 年頃までフランスに滞在し、帰国後は東京に住んだこともあるが、1973 年以後は愛媛を制作の拠点にした。2011（平成 23）年 2 月 9 日愛媛県で逝去。【文献】大河内菊雄編「田中坦三年譜」『田中坦三個展〔案内状〕』（大阪・番画廊　1983）／洲之内徹「大きな手」『さらば気まぐれ美術館』（新潮社　1988）／『第十三回国画会展覧会目録』（1938）／『第 7 回版画展目録』（日本版画協会　1938）／鈴木仁一「版画協会展を鑑る（上）―新協展、新日本百景など―」『浮世繪界』4 － 2　1939.2）／『第 17〔18〕回日本版画協会展目録』（1949）／『古沢岩美美術館月報』25（1977. 6）／『モダンアート協会 30 年史』（モダンアート協会　1980）（三木）

田中照夫 (たなか・てるお)

版木会が発行した創作版画集『版』第 12 集 (1938.1) に木版画 1 点を発表する。創作版画集『版』は愛知県第一師範学校（現・愛知教育大学教育学部の母体）関係の版画同好会の出版物と考えられる。【文献】『版』12 ／「第一師範学校（名古屋）及び附属学校に関係する資料」インターネット（加治）

田中時彦（たなか・ときひこ）

1920 年代中頃に神戸で活動した前衛美術家と推定。1924（大正 13）年前半期に大正期新興美術運動の美術家・岡本唐貴・浅野孟府らが神戸で「DVL」を結成、参加したか。同年 11 月、兵庫県美術協会主催の「第 4 回県展」に《風景》《静物》《私のオフィーリアに捧ぐ》を出品。1925 年 1 月開催の「DVL・FORM 展」（神戸三宮　カフェー・ガス）に出品。またこの年 5 月発行の『横顔』第 7 号（犬飼武、竹中郁ら関西学院文芸グループと「DVL」の同人らが 1924 年 11 月に創刊した詩と美術の同人雑誌）の表紙を構成派的幾何学的形態の木版画で制作。同年 6 月、グルッペ造型展（カフェー・ガス）に出品。同年 11 月頃、装飾美術、文案訳文、紀念塔設計、建築設計、家具設計を活動分野として竹中郁（出版部）・今井朝路（美術部）・寺島貞志郎（美術部）らが「ESCALE」を結成、その第 1 回展として開催の「エスカアル生誕紀念　絵と詩の展覧会」（神戸山ノ手・中央メソヂスト協会、11 月 5 日～ 7 日）に《一つの舞台装置》など 3 点の素描を出品した。また、写真雑誌『白陽』にも寄稿している。【文献】平井章一「岡本唐貴、浅野孟府と神戸における大正期新興美術運動」「同（承前）」『兵庫県立近代美術館研究紀要』5・6 （1996・1997）／『大正期新興美術資料集成』（国書刊行会　2006）（滝沢）

田中二郎（たなか・にろう）

1910（明治 43）年、田中恭吉・藤森静雄・久本信男（久本 DON）・大槻憲二らと同時期に白馬会原町洋画研究所にいた。恩地孝四郎とも親交があり、1911 年 9 月から 1915 年 8 月までの恩地に宛てた絵入り葉書が確認でき 1911 年 10 月から 11 月にかけて、田中恭吉・藤森・大槻と共に同人回覧雑誌『ホクト』に参加（2 号で終刊）。1913 年 5 月から 1914 年 3 月まで田中恭吉や藤森・大槻らと同人回覧雑誌『密室』に参加（9 号で終刊）。自在にペンネームを変え、「じろう・二朗・二呂・Niro・NiRoo・NR・T」のほか、「二一波・豆果・素風・渚・一果」などと名乗っている。『密室』は、第 6 号（1913.12.2 発行）に恩地が加わってモノタイプの版画を発表したことや香山小鳥による遺作の木版画が収録されたこと、第 7 号（1914.1.14 発行）から田中恭吉が木版画を発表し始めることから、版画誌『月映』（1914.9 ～ 1915.11）への胎動を示す同人誌と位置づけられるが、田中二郎も第 6 号で木版画を 4 点発表している点が注目される。また「1910 ／ NIRO」（あるいは「1917 ／ NIRO」）と読める年記・サインのあるスケッチ板に描かれた油彩画の裏面には木版が彫られている。その版画作品は不明ながら、『月映』の 3 人と親交を持ちつつ、彼らと同じように身の回りにあるスケッチ板を流用して自刻木版に取り組んでいたことが

窺える。さらに1915年8月の恩地宛の葉書は木版画である。石川義一・大槻・恩地・久本・藤森・榎本秀夫と共に「内在社」同人となり、1921年7月から1922年11月まで刊行された月刊文芸美術音楽誌『内在』(14号で終刊)の編集人となり、詩歌を発表している。『内在』7号では内在社の運動資金を得るための作品頒布会のひとつとして「田中二郎油画会」の企画を発表。同号の編集雑記で「田中の作は、静かな、やや寂しさのあるうちにひそむ命を感じさせる様な特色がある。色調は渋く落ちついてゐる」と説明されている。当時、東京市下谷区下根岸町九一に在住。【文献】三木哲夫「『ホクト』・『密室』・『月映』の周辺」『竹久夢二とその周辺』展図録(和歌山県立近代美術館・宮城県美術館　1988)／『近代日本文学・美術研究資料　回覧雑誌『密室』翻刻』I・II・III(甲南大学文学部木股知史研究室　2009)／『回覧雑誌『密室』解説』(甲南大学文学部木股知史研究室　2009)

田中　一(たなか・はじめ) *1900～1938*

1900(明治33)年1月11日東京市本所区緑町三丁目に生まれる。小石川区礫川小学校を卒業。製版技術工になり、後に独立。1935年頃からエッチングを制作するようになり、曽我尾武治らと交友。西田武雄とも面識があった。1937年か、応召され、中支で鉄道の守備につく。1938年の第10回第一美術協会展に友人に依頼して出品した銅版画《材木置場》(1937)が入選。同年(1938・昭和13)年7月23日中国で戦死。その後、『エッチング』第71号(1938.9)には、西田武雄による「名誉の戦死せる田中一上等兵」と題する追悼文と《材木置場》の図版が掲載された。また、翌1939年5月の第11回第一美術協会展には遺作の銅版画が並んだ。【文献】『エッチング』71／『日本美術年鑑』1940年版(美術研究所　1941)(三木)

田中久一(たなか・ひさいち)

愛知県半田町の教師仲間による版画団体・版刀会が発行した版画誌『運』第10号〔1935〕に《笑顔》を発表。現在『運』は第5～7·10号(1931～1935)のみを確認。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

田中比佐良(たなか・ひさら) *1891～1974*

1891(明治24)年8月25日、岐阜県に生れる。本名は久三。松浦天龍に南画を学ぶ。1921(大正元)年から主婦之友社へ13年間勤務。挿絵画家、漫画家として活動し、創作版画にも若いころから関心を寄せた。1929(昭和4)年に、主情派第2回美術展から作品を出品して、主に挿絵画家メンバーで結成された「主情派美術協会」に玉村方久斗・恩地孝四郎・小村雪岱らと入会、同年『主情派現代風俗版画集』(第2回)に多色摺木版画《舞踏詩高潮の図》を発表。1929年の版画誌『爆竹』(摺は西村熊吉)第4号(1929.10)に《女の胴体》(単色版画―墨摺のことと推定)、第6号(1930.3)に《漫展出品の一部、キモノだけの表情とエロ》(単色版画)を発表。第7号(1930.5)には「第6号寸評」を寄稿。1929年の『漫画講座』第1巻に「婦人・家庭漫画の描き方」を担当執筆、また随筆集『涙の値打』(小学館)を出版。1930年からは読売新聞社嘱託となる。1939年には『高見澤木版社版　昭和錦絵　美人十装』(小村雪岱・木村荘八・林唯一・鴨下晁湖・小磯良平・中村研一・中川一政らとの木版多色摺版画全10枚)の内、木版多色摺の《湯上り美人》を制作。1974(昭和49)年8月31日八王子で逝去。享年84。没後、『田中比左良画集』(講談社　1978.5))が出版された。【文献】『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社　1998)(岩切)

田中秀三郎(たなか・ひでさぶろう)

大阪で前田藤四郎や武田新太郎らが発行した版画同人誌『黄楊』(黄楊社発行)は創刊号が確認されている。その創刊号(1933.8)に《建物のある風景》を発表。作者言には水彩画として描いたものを版画にしたこと、建築物の直線と近景左方の樹木(夾竹桃)の丸味との対照に興味を持って描いたこと、そして地面に刻まれた遮光線のやり方をもっと工夫したらよかったことなどが記されている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

田中　博(たなか・ひろし)

福岡市住吉小学校の教員であった田中は、西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第1号(1932.11)にエッチング《少年》、第4号(1933.2)に同《静物》、第7号(1933.5)に椿を手にした女性を描いたエッチングを発表。第4号には日本人に最も適した新しい版画であり、児童には図画と手工が合さったよい教材であるという内容の小文「美術教材としてのエッチング」を寄稿する。そのことを踏まえて、市内小学校の図画教師を対象にしたエッチング講習会(1933.3.27～28　福岡市住吉小学校参加者18名)を田中主催で開催する。同年4月に福岡市西新小学校へ転任。そこにおいてもエッチング普及に尽力し、その奮闘振りを「エッチングの児童教育上の価値」や「諸先生の感想」として『エッチング』第9·11号(1933.7·9)に寄稿する。1936年8月12·13日には田中主催のエッチング講習会(会場:八幡市幼稚園　講師:西田武雄)を開催(『エッチング』47　1936.9)。1936年9月当時、福岡県若松市鴨生田の自宅に「北九州エッチング協会」の事務局を置き、講習会に参加した花田一の自宅を「北九州エッチング倶楽部」と称し、プレス機を置いて土曜日に会員には使用させた(田中博「書翰」『エッチング』47)。その翌年、台湾の新竹州大湖郡大湖庄新開国民学校に赴任したことから、「台湾の自然と人」、「訓導漫記　台湾にて」を『エッチング』77·78号(1939.3·4)に寄稿。1942年春には大湖庄新開国民学校の校長に就任している。日本版画奉公会会員(『日本版画』126　1943.7)。【文献】『エッチング』1·4·6·7·9·11·47·77·78·112・126　(加治)

田中正実(たなか・まさみ)

美術評論家・外山卯三郎は、北海道帝国大学予科に在学の頃、ダダなどの新しい絵画運動に共鳴し、北大の学生や予科教授らを誘って、1925年1月に『詩と版画』(1922.9～1925.8　全13輯)をモデルとした詩と美術と演劇の月刊同人誌『さとぽろ』を発行する。発行所は外山が主導する「札幌詩学協会」で、同誌は1929年6月までに28冊が刊行された。田中正実は第4・5・7・14・16・17号(1925.9～1927.5)に散文・短歌・詩を発表。また札幌詩学協会主催による北海道で最初の創作版画展(1925.10.25～27　札幌商業会議所　第1回展のみ)に《キッス》《嘲笑》《夜の精》の木版画を出品したところ、当時小樽新聞記者で自らも版画を制作する唯是日出彦(「蒼玄会」会員、『さとぽろ』第7号に木版画を制作)から、「田中正実君のは見どころが面白いだけ。何の味もうま味もない。」(小樽新聞「版画展印象」 1925.9.27)と手厳しい批評を受けた。1925年10月全道規模での初の公募展「北海道美術協会展(道展)」(5～18　札幌・農業館)の審査に異議を唱えた

外山が、同年11月に「一切審査しない」ことを宣言して開催した「札幌詩学協会主宰美術展覧會」（11～15日　札幌・薄野太平館　第1回展のみ）にも出品歴をのこす。田中について、「資料集「さとぽろ」に関わった人たち」（『北海道立文学館20周年　特別展「さとぽろ」発見』 2016）によると、その略歴は「歯科医。「さとぽろ」同15号に同人として名前が記載されている。第4～17号と『全北海道詩集』に詩や短歌を発表した」とある。【文献】今井敬一編著『北海道美術史　地域文化の積みあげ』（北海道美術館　1970.3）／『北海道立文学館20周年　特別展「さとぽろ」発見　大正昭和・札幌芸術雑誌にかけた夢』展図録（北海道立文学館　2016.1.30～3.27）（樋口）

田中三生（たなか・みつお）

宇治山哲平は出身地大分県日田町（現・日田市）において、同地の美術愛好家たちと版画誌『朴ノ木』を発行する。その第1号（1933.4）に《山の湖水》、第2号（1933.7）に《風景》《チューリップ》を発表した。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」（『大分県立芸術会館研究紀要』1　2002.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

田中義一（たなか・よしかず）

徳力富吉郎・亀井藤兵衛・麻田辨次らは関西の創作版画運動を推し広めようと京都で「大衆版画協会」を組織し、版画誌『大衆版画』（1931）を創刊する。田中も第2号（1931.11）から参加し、《月の出》を発表するが、『大衆版画』は以後廃刊となる。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

田中芳郎（たなか・よしろう）

1935（昭和10）年東京美術学校油画科予科に入学。在学中、臨時版画教室で学んだものと思われ、1938年の第7回日本版画協会展に銅版画《風景》《顔》が初入選。恩地孝四郎は「田中芳郎、『風景』『顔』がある。これも下地の出来てゐる組であるがひどく神経〔質で〕はないが、まだ趣を具へてはゐない」（「版展のエッチング」『エッチング』74　1938.12）と評している。翌1939年12月の第8回展（「田中芳野」とあるも誤記）にも《バレーボール》《観劇》が入選。1940年3月の『エッチング』第88号には《映画》の図版が掲載された。この作品は臨時版画教室助手の佐々木孔が西田武雄に贈った2点のうちの1点で、図版のキャプションには、「映畫（6.5寸×8.0寸）　美校　田中芳三郎」とあるが、「芳三郎」は「芳郎」の誤記であろう。また、この2点は恐らく第8回日本版画協会展の入選作だったと思われる。同月、東京美術学校を卒業。12月の第1回日本エッチング展に《観客席》《婦人像》、1941年の5月第2回展に《バレー》がそれぞれ入選した。その後、辻元に改姓。1972年頃は、東京都杉並区高井戸に住む。【文献】『東京藝術大学百年史『第七回版画展目録』（日本版画協会　1938）／『第八回版画展目録』（日本版画協会　1939）／『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇　第三巻』（ぎょうせい　1997）／『同窓生名簿　東京美術学校　東京芸術大学美術学部　東京芸術大学大学院美術研究科』（同窓会名簿編集委員会　1972）／『資生堂ギャラリー七十五年史　一九一九～一九九四』（求龍堂　1995）／『エッチング』74・88・96・101（三木）

田中與三（たなか・よぞう）

中学校卒業を機に田中は根市良三、原子康三郎、柿崎卓治、松下千春の5人で余人社をおこし、デザイン性の高い版画誌『純』を創刊（1932.9）。≪村娘≫≪野草≫を発表するが、『純』は1号で廃刊。柿崎を除く4人は1933年前後にそれぞれ上京。連れ立って、郷里の先輩棟方志功や版画誌『白と黒』『版芸術』の主宰者である料治熊太を訪ねていることが根市の日記「良記暦」に記されている。『版芸術』第9号（1932.12）全日本版画家年賀状百人集に年賀状を発表。【文献】板倉容子「版画誌を傍らに－青森県創作版画家たちの青春」『緑の樹の下の夢－青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館　2001）／『創作版画誌の系譜』（加治）

田中連蔵（たなか・れんぞう）

大分の版画家・武藤完一のコレクションに、「田中連蔵」と署名の入ったエッチング《樹木》と無署名だが同一人の作品と思われるエッチング《〔公園風景〕》2点がある。《樹木》作品の余白には、「佐賀女師附属　田中連蔵」と注記があり、戦前に武藤と交流のあった教諭の一人ではないかと思われる。（樋口）

田邊　至（たなべ・いたる） *1886～1968*

1886（明治19）年東京市神田猿楽町三丁目に生まれる。哲学者田邊元は実兄にあたる。1905年東京美術学校西洋画科予備科に入学し、黒田清輝に師事。1910年東京美術学校西洋画科を卒業。研究科に進み、西洋画科助手（1911）を経て、1919年に東京美術学校図画師範科助教授に就任。1922年から1924年まで文部省在外研究員としてヨーロッパに留学。帰国後の1928年に図画師範科教授となり、1932年西洋画科に転じ、1944年に退官するまで多くの後進を育てた。画壇へのデビューは、在学中の1907年の第1回文展に油彩画《無音》が入選。その後も文展に出品していたが、1914年の二科会設立に与し、第1回展では鑑査員を務めるも会期中に脱会。以後は官展系の作家の道を歩み、1944年の戦時特別展まで、文展・帝展・文展・紀元二千六百年奉祝展・新文展に出品を続けたほか、光風会展（1918会員）などにも出品した。その間、帝展・文展・新文展の審査員をしばしば務め、1929・37・40・41年には朝鮮総督府美術展の審査員も務めている。また、1936年には海軍軍事普及部事務嘱託となり、中支に派遣され記録画を制作。1938年にも南支に派遣され、1940年には海軍省軍務局第四課嘱託を依頼されている。

銅版画は、東京美術学校助教授に就任した1919年頃から本格的に始めたものと考えられる。主な展覧会への版画の出品は、光風会展へは1920年の第8回展に油彩画4点・水彩画2点ともに《子牛》など10点、翌1921年の第9回展に《冬枯》など4点を出品。また、日本創作版画協会へも1920年から出品し、第2回展に《風景》など5点、1921年の第3回展には《冬の雑木林》など4点を出品。1922年1月頃か、会員に推挙され、同年の第4回展に《並木路》など5点を出品。また、同年（1922）には文部省在外研究員として渡欧し、西洋画の研究とともに、モンマルトルの印刷工場等に通い、銅版画の技術向上に努めた。1924年に帰国し、同年の第6回展に、滞欧作の《ベニス》など11点のエッチングと、《少女》など4点のドライポイントを出品。その後、1929年暮の「洋風版画会」の結成に参加し、1930年の第1回展に《横臥裸婦》など、1931年の第2回展に《裸婦》（ドライポイント）など2点を出品。1930年には『エツチングの技法』（文房堂）、1931年に平塚運一・織田一磨と『創作版画　木版石版　エツチングの作り方』（崇文堂）を刊行し、同書で

は「エッチングの作り方」を執筆した。また、1931年1月の「日本版画協会」の結成には、会員として参加するも、出品は1933年の第3回展と1934年パリ装飾美術館での「日本現代版画とその源流展」のみにとどまり、《肖像》など4点と石版画《裸婦》を出品した。1935年5月には東京美術学校に臨時版画研究室が新設されたが、研究室の主任として、平塚運一・松田義之らと共に指導に当たった。1940年12月に西田武雄らによって「日本エッチング作家協会」が設立され、会長となり、第1回日本エッチング展覧会に《裸婦》、第2回展（1941）に《和蘭人物》、第3回展（1942）に《裸婦》を出品。また、1943年5月の「日本版画奉公会」（会長岩倉具栄）の設立に際しては、副会長となった。1944年の東京美術学校退官後は悠々自適の生活に入り、戦後の1946年からは鎌倉に居住する。1947年に「鎌倉美術クラブ」を創立。1949年には鎌倉市展が開催されたが、1956年まで出品を続けた。1955年神奈川県立美術館で自選展を開催。1968（昭和43）年1月14日鎌倉市で逝去した。なお、本稿を執筆にあたって、盛岡市文化振興事業団の佐々木繁美氏に資料を提供して頂いた。【文献】田辺至「私の生活」『中央美術第』7-10／田辺至「モンマルトの版画工房」『アトリエ』1-7／三木哲夫「[資料]日本創作版画協会展総出品目録」『和歌山県立近代美術館紀要』2（和歌山県立近代美術館1997）／『今純三・和次郎とエッチング作家協会』展図録（渋谷区立松濤美術館他　2001）／『日本近代の青春』展図録（和歌山県立近代美術館他　2010）（河野）

田邊達郎（たなべ・たつろう）

1930（昭和5）年2月の第17回光風会展に《少女》《女》（各油彩画か）が入選。また、同月の第17回日本水彩画会展には木版画《漁村》《石切場》が入選した。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　2002）／『第十七回日本水彩画会展覧会目録』（1930）（三木）

谷上廣南（たにがみ・こうなん） *1879～1928*

1879（明治12）年に生まれる。明治期から大正期にかけて活躍した染色図案家。1925年大阪図案家協会設立にかかわり、繊維商社の伊藤萬商店（後のイトマン）が扱う染織品の図案を描く。大正初期に欧米の珍しい花々が輸入され、日本人の洋花への関心が高まる中、日本画の手法を用いて色鮮やかな洋花を描いた大判の木版画集『西洋草花図譜』（芸艸堂　1917　全5冊125図）や『象形花卉帖』（芸艸堂　1913　全2冊24図）の刊行がある。1928（昭和3）年大阪で逝去。【文献】『京都古書籍・古書画資料目録』8（京都古書組合　2007）／ブログ「玉乗りする猫の秘かな愉しみ」（2015.2.1）（樋口）

谷川真司（たにかわ・しんじ）

1936年8月、長船一雄・浅井紫明ら8名で結成された名古屋エッチング協会会員の一人に名を連ねる（事務局は長船一雄方）。同年8月27日、名古屋電気ビルで開催の西田武雄を招いたエッチング座談会にも参加。【文献】『エッチング』47（樋口）

谷口薫美・董美（たにぐち・くんび） *1909～1964*

1909（明治42）年1月13日徳島県三好郡辻町に生まれる。旧姓は山下薫美。洋画家山下菊二（1919～1986）は実弟。画名に「董美」を使うのは戦後か。1926年徳島県立徳島中学校を卒業。しばらくして県内の小学校教員となる。1931年谷口幸枝と結婚。谷口姓となり、三好郡池田町に住む。この頃から木版画を始め、翌1932年に平塚運一の主宰する『版画研究』第1巻第1号（1932.3）に木版画《水車》を投稿し、図版が掲載された。同年11月か、小野忠重らの「新版画集団」に参加（12月10日付の名簿に名前あり）。機関誌『新版画』の第8号（1933.1）に《谷間の水車》《スキー》、第10号（1933.10）に《小製作所の朝》、第11号（1933.12）に《赤毛布》、第12号（1934.4）に《三番叟》、第15号（1935.1）に《賀状》を発表。また、同集団主催の展覧会には、第2回展（1933.3）に《三番叟》《丘上》《鉄橋》《雪の校舎》など9点、岐阜展（1933.7）に《三番叟》《雪の校舎》、第3回展（1933.11）に《三好橋》《岩》、第4回展（1934.6）に《岩》、第1回版画アンデパンダン展（1934.6）に《自画像》、小品展（1935.5）に《岩》《燈籠流し》《髪洗ひ》《夕陽》《土管》《木倉》、第6回展（1936.10）に《阿波踊》《源之丞人形芝居》など6点を出品。その間の1935年には、教師仲間と池田町で「野人社」を結成し、デッサン会・展覧会（1936・1937・1938）などを開催。また、大分の武藤完一の主宰する『九州版画』第15号（1937.7）にも《ブドウ》を発表した。1939年12月教職を辞し、東京に転居。保険会社に勤めながら、恩地孝四郎の主宰する版画研究会「一木会」に参加し、指導を受ける。翌1940年の第9回日本版画協会展に《讃岐富士》《阿波人形・首（三番叟）》が初入選。その後も、第10回展（1941）に《谷間の貯水池》、第11回展（1942）に《首人形下手箱》、第12回展（1943）に《蔓橋》を連続して出品。1943年日本版画奉公会会員。1944年には日本版画協会会友に推挙され、同年の第13回展に《建設》を出品した。また、「一木会」の仲間で作った版画集『一木輯』第Ⅰ輯（1944. 9）に《山門》を発表。その後も、第Ⅳ輯（1948.9）、第Ⅴ輯（1949）、第Ⅵ輯（1950）に参加した。1945年6月応召。戦後は池田町に戻り、徳島を拠点に制作活動を開始。1946年の第1回徳島県展、1947年の第1回四国洋画展で特選を受賞。1948年の四国中央美術協会や制作新樹社の結成にも参加し、1949年には教職に復職した。日本版画協会展には、1947年の第15回展に出品し、再び会友として復帰したが、その後の出品は第16回展（1948）、第17回展（1949）、第24回展（1956）にとどまっている。1964（昭和39）年8月20日徳島県三好郡池田町で逝去。1969年には山下菊二により「弔い展」（二人展　11.3～15　東京・日本橋画廊）が開かれた。作品の多くは徳島県立近代美術館に収蔵されている。【文献】『新版画集団第二回展覧会目録』（1933）～『新版画集団第六回展覧会目録』（1936）／『特別展 美術の国徳島Ⅱ　谷口董美、山下菊二兄弟　故郷のイメージを描く』図録（徳島県立近代美術館　2009）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『創作版画誌の系譜』（三木）

谷口香嶠（たにぐち・こうきょう） *1864～1915*

元治元（1864）年8月16日泉州・日根野（現在の大阪府泉佐野市）に生まれる。本名は辻雅秀、通称槌之助。一時期医者を志し上京するが、その後帰郷し、母方京都の谷口家の養子となる。1884（明治17）年幸野楳嶺の画塾に入門、京都府画学校北宋科に学び、菊池芳文・竹内栖鳳・都路華香とともに「楳嶺門下の四天王」と呼ばれる。内国勧業博覧会や京都青年絵画共進会で受賞を重ね、1907年の第1回文展で《山嫗》が3等賞を受賞。以降は文展審査員や京都市美術工芸学校、京都市立絵画専門学校で後進の指導にあたる。有職故実に通じ歴史画を得意

とする一方で、光琳や琳派の研究にも関心を寄せ、浅井忠や神坂雪佳に先駆け光琳絵画を翻案した創作図案の木版画譜『光琳画譜』（芸艸堂　1891）を刊行。1902年には京都市の委嘱でトリノ国際現代装飾美術博覧会を視察し、帰国後、浅井忠･神坂雪佳らと工芸研究団体「京漆園」に参加。また神坂雪佳や竹内栖鳳らと「葦手絵会」を設立して、工芸図案の刷新を図る。画塾「自邇會」門下には津田青楓・小早川秋聲などがいる。一枚摺の版画は、歌舞伎舞踊の変化物として当時人気のあった「鷺娘」を題材にした木版画《白鷺の精》1図があり、同図は1902年に谷口が歌舞伎舞踊を踊る祇園の芸者「光本おさだ」の姿を描いた下絵を、1918年京都の佐藤章太郎が池田清助より譲り受け木版画に上梓したものといわれる。そのほかには菊池芳文・竹内栖鳳・山元春挙と谷口の4人による京都の四季を描いた木版画帖『雍府画譜』（芸艸堂　1885～1897　全3冊）や横山大観・一見連城などと合作の木版画集『風俗図譜』（芸艸堂　1913）、図案集として鈴木瑞雄・田中幽峰と共著の『工藝図鑑』（田中治兵衛　1891　全3巻）･『古制徴證』（芸艸堂　1902）・谷口香嶠監修『古代模様』（1901～1914）などがある。1915（大正4）年11月9日京都市で逝去。【文献】『大正シック展』図録（東京都庭園美術館ほか　2007）／『京都図案の伝統と冒険　芸艸堂』冊子（京都精華大学情報館　2009.11）／「日本唯一の手木版和装出版社 - 芸艸堂」ホームページ（2016.7.17）（樋口）

谷口富美枝（たにぐち・ふみえ） *1910～2001*

1910（明治43）年8月2日東京市に生まれる。版画では「フミエ」「フミヱ」の名前も使い、1940年頃から雅号を「仙花」とする。1928年女子美術学校日本画科高等師範科に入学。1930年川端龍子に師事し、同年の第2回青龍社展に《麦秋》が初入選。1931年女子美術専門学校（1929年改称）高等科日本画部を卒業。この頃は埼玉県浦和市中丸に住む。卒業後も青龍社展の第4回展（1932）、第6回展（1934）から第9回展（1937）に出品し、第6回展で社友に推挙されたが、1938年脱退。また、1933年に始まる春の青龍社展も、第1回展から第5回展（1937）まで出品した。その間、女子美術専門学校高等科日本画部卒業生が結成した「青柿社」に参加し、1933年の第2回展と翌年の第3回展に出品。また、1933年には文化学院美術部専修科に入り、1年間学んだが、ここで版画と出会い、9月の第3回日本版画協会展に木版画《バスガール》が入選。また、同校で開かれた西田武雄による第1回エッチング講習会（10.2～7）に参加。その時に制作したと思われる銅版画《〔子供を抱く女と子供たちの群像〕》《舞妓》《仏像》の図版が、『エッチング』の第12号（1933. 10）と第13号（1933.11）に掲載された。続く第2回講習会（11. 20～27）への参加は不明であるが、第15号（1934.1）には木版《賀状》の図版が掲載されている。翌1934年の文化学院美術部専修科終了後も、第9回国画会展に木版画《耕地》、1935年の第10回展に木版画《着物》を出品。また、長野県須坂の版画誌『櫟』の第7輯（1935.8）に木版の《賀春〔賀状〕》、第9輯（1936.4）に《賀状》を発表したが、以後、版画の活動はない。1938年の「青龍社」脱退後は、1939年に第1回個展（5.1～4　銀座・紀伊国屋）と1940年に第2回個展（6.1～5　銀座･資生堂ギャラリー）を開催したほか、1940年の歴程美術協会第1回京都展・第2回歴程美術協会展（「緑文英」の名で出品）、1941年の第2回美術文化協会展などにも出品。1943年2月に結成された「女流美術家奉公隊」（各団体会友以上の女流画家50名が参加）では役員となっている。1944年日本画家の船田玉樹と結婚。船田の郷里である呉に疎開。戦後は、1949年の第1回広島美術展の審査員（1953年の第5回展まで）などを務めたが、1953年に埼玉の実家に戻り、船田玉樹と離婚。1954年に女流画家協会などに会員として迎えられたが、1955年に日系米国人と結婚し、渡米。1957年離婚。その後は、ウェイトレス・裁縫工場のお針子・家庭教師などで生計を立てながら、1967年より1975年にかけてロサンゼルスで発行されていた日系人の文芸同人誌『南加文芸』（南加文芸社）にたびたび文章を投稿した。2001（平成13）年8月11日ロサンゼルスで逝去。【文献】角田知扶編「谷口仙花年表」（未刊　呉市立美術館学芸員角田知扶氏提供）／北原恵「“モダン”と“伝統”を生きた日本画家・谷口富美枝（1910－2001年）」『待兼山論叢　日本学篇』48（大阪大学文学部　2014. 12）／『資生堂ギャラリー七十五年史　一九一九～一九九四』（求龍堂　1995）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『資生堂ギャラリー七十五年史　一九一九～一九九四』（求龍堂　1995）／『エッチング』12・13・15／『創作版画誌の系譜』（三木）

谷中安規（たになか・やすのり） *1897～1946*

1897（明治30）年1月18日、奈良県磯郡初瀬町大字初瀬第98番屋敷（現・桜井市初瀬81番地）に生まれる。幼少時に父が京都西陣で染物工場を経営し始めたので一時期京都に住んだ。1903年12月に母が他界。翌1904年に父が朝鮮へ渡り「京城」で用品雑貨店を開業、安規は叔母（父の妹）の嫁ぎ先である新潟県刈羽郡鯨波村（現・柏崎市鯨波）の龍泉寺に預けられ、村立鯨波尋常小学校に入学。1910年尋常小学校を卒業後、叔母の夫内山賢峰が前年に入山していた新潟県古志郡塩谷字下塩谷村の妙圓寺に一旦落ち着き、まもなく朝鮮から迎えにきた父とともに「京城」に渡る。「京城」の高等小学校を卒業し、1915（大正4）年に護国寺（現･文京区大塚）にある旧制･豊山中学校に入学する。1918年同中学校を退学、その後ながい間中学校時代の友人や知人を頼る居候生活と浅草の木賃宿生活を繰り返した。挙動においても奇行が目立った。1922年発行の永瀬義郎著『版画を作る人へ』を読み、木版画制作を独習、1924年には長谷川巳之吉経営の第一書房の居候社員となり、日夏耿之介、堀口大学、佐藤春夫、与謝野晶子らを紹介される。1926年1月に中学時代の同窓などと、『マヴォ』の出版社と同じ長隆舎書店から文芸同人雑誌『莽魯聞葉』を創刊、グロテスクな内容の版画の挿絵を寄せた。また、日夏らによるゴシック・ロマンスを志向する雑誌『奢灞都』にカットや目次の縁装飾を寄せ､自らもロマンティックな悪魔主義を謳って「眩法派」と名乗って創作活動を展開した。1928（昭和3）年、日本創作版画協会第8回展に初入選、これをきっかけに恩地孝四郎、前川千帆、平塚運一ら版画家たちを知った。また、『クラク（苦楽）』連載の佐藤春夫による翻訳小説の挿絵を描いたり、田中貢太郎の『怪談全集』の装丁を制作したりして、本に関係する仕事を手がけるようになる。一方この時期はダンスの名手としても知られた。1931年頃から、関東大震災から復興を遂げた新東京の景観や文化といった現実と、仏典や文学、朝鮮での記憶などをイメージソースとする妄想が混ざり合った幻想的版画を日本版画協会展や国画会展に継続的に発表し、個性的・特異な版画家として注目される。1932年1月に前川千帆の紹介

状を持って料治熊太を訪ね、料治発行の版画誌『白と黒』『版藝術』の同人となる。以後多くの作品をこれらの版画誌に発表した。この年、『版藝術』8号に『影絵芝居』（扉絵＋13点）を発表したほか、郷愁観あふれる自刷りの連作版画『少年画集』（8点）を発行、代表作となる。1933年にも意欲的に版画制作に取り組み、『方寸版画』（10点）や『街の本』（4点組）、《春夜》（『白と黒』35号）、《青春の墓標》、安規特集である『白と黒』41号掲載の版画（12点）など、代表作となるモダンと土着が混ざり合ったイメージあふれる作品を多数世に送り出した。また、佐藤春夫の紹介で内田百閒と知り合い、童話集『王様の背中』（1934）の挿絵制作の仕事にも精力的に取り組んだ。以降百閒と親しく交流し、挿絵や装丁を多数制作した。1935年頃から天使や動物、子どもなどが登場する童話的作風の版画を制作するようになり、また挿絵や装丁の仕事を数多く手がけた。太平洋戦争時には貧困と食糧難の生活を送りながら、身近な住民、交流のある文学者や編集者などに支えられて本の仕事を中心に創作活動を続けた。1946（昭和21）年9月9日、空襲で焼け出された後に建てた掘立小屋で死去しているのが見つかる。【文献】『空想の玉手箱―没後五十年 谷中安規の版画世界』展図録（そごう美術館ほか　1996）／『谷中安規の夢　シネマとカフェと怪奇のまぼろし』展図録（渋谷区立松涛美術館ほか　2003）／『鬼才の画人 谷中安規－1930年代の夢と現実』展図録（町田市立国際版画美術館ほか　2014）（滝沢）

種田豊司（たねだ・とよじ）

1928年（昭和3）10月発行の岡田龍夫編輯兼発行『形成画報』創刊号に《F街201番地殺人事件覚書》というリノカット作品を寄せる。他の掲載作品出品は未確認。【文献】「マヴォ版画目録」『町田市立国際版画美術館紀要』8（2004.3）（滝沢）

種村ヒサ子（たねむら・ひさこ）

種村が3年に在学中の1936年、山口県宇部高等女学校では図画の時間が一週あたり1時間のために、1枚のエッチング作品を完成させるには2ヶ月という長い期間が必要だった。種村は、題材に柿ときのこを選び、エッチング作品にした。図画担当の尾藤武夫教諭は自身の作品と共に生徒の作品を日本エッチング研究所の西田武雄に送った。種村の作品を含んだそれらの作品は研究所機関誌『エッチング』第50号（1936.12）に掲載されている。そこには尾藤教諭の「女学校のエッチング」という報告書も掲載されていて、宇部高等女学校の授業の内容も知ることが出来る。【文献】『エッチング』50（加治）

田野義雄（たの・よしお）

長野県須坂の信濃創作版画研究会が発行した版画誌『櫟』第1輯（1933.8）に《一の鳥居》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

田原幸三郎（たはら・こうざぶろう）

大分県大野郡で生野正義らが発行していた版画誌『大野版画』第3号（1934.5）に《麦》を発表。第4号（1934.7）に掲載された武藤完一の作品評には「素朴的な彫りに一種の味がある。しかし何だかもの足りない。」と記されている。当時、田原は大野郡で教員をしていたとみられる。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」（『大分県立芸術会館研究紀要』1号　2002.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

田原幸三（たはら・こうぞう）

長野県の小学校教員。長野県須坂の小林朝治が、1933（昭和8）年夏に平塚運一を講師に招いて開催した版画講習会を受講したと思われ、講習会受講者を母体に結成された「信濃創作版画研究会」に参加。同年8月に同研究会によって創刊された『櫟』の第1輯（1933.8）に《夜店》を発表。以後、第2輯（1934）に《賀状》、第3輯（1934. 7）に《電柱風景》、第5輯（1935.4）に《賀状》、第7輯（1935.8）に《雀》、第8輯（1935.12）に《風景》、第9輯（1936.4）に《追儺祭》、第10輯（1936.7）に《夜景》、第11輯（1936.11）に《茄子》、第13輯（1937.6）に《子供》を発表した。また、長野県の「下水内手工研究会」が創刊した『葵』（1934.9～1938.3　5冊か）の第4号（1937.7）に《賀状》、第5号（1938.3）に《神楽》《無題》を発表している。一方、中央展へは、1936年の第11回国画会展に木版画《万座温泉プール》を出品し、初入選。翌1937年の第12回展にも《入浴》が入選した。なお、国展出品時は、長野市に住み、長野県師範学校附属小学校に勤務していた。【文献】『第十一回国画会展覧会目録』（1936）／『第十二回国画会展覧会目録』（1937）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『創作版画誌の系譜』（三木）

田部喜市（たべ・きいち） *1900～*

1900（明治33）年若松市（現在の会津若松市）に生まれる。1920年県立会津中学卒業後、洋画家日比野龍三（1919年より数年間会津に滞在）の紹介で、上京して白馬会赤坂溜池の葵橋洋画研究所に学ぶ。1922年頃帰郷、会津在住の洋画家による「紅樹社」（1922年11月結成）に入会するが、1926年青木志満六らと退会して「黙歩会」を結成し1927年頃まで活動を続ける。また1926年東京の相田直彦・春日部たすくらも参加して会津中学校美術クラブ出身者による美術団体「彩光会」が発足し、田部も名を連ねる。その後「彩光会」仲間の6名（渡部菊二・青木志満六・相田義男・長尾三郎・古川直尉と田部喜市）で1930年に「会津創作版画会」を創設し、竹久夢二の名付けで「みちのく（道乃奥）社」と命名、版画展が高橋土産物店二階（画廊）と会津物産館で開催され、冊子を刊行（村山鎮雄『福島の近代美術』（三好企画　1992）では、版画集『道乃奥』となっているが、未確認）、田部の版画も掲載されたと思われる。田部は1937年召集され、1939年除隊後は会津若松市の傷痍軍人の相談所に勤務。戦後は食料品店を経営の傍ら、会津美術協会第8回展（1952）の洋画部門で受賞するなど絵画の制作は続けていたようで、会津高校同窓会誌『にろく』に詩歌や文章を寄稿、第15号（1953.1）に口絵2点を制作、第29号（1977.1）の会員消息にも文章を寄せているが、その後の消息は不明でる。【文献】村山鎮雄『福島の近代美術』（三好企画1992）／田中みなみ「図案家・青木志満六の足跡　会津若松市のモダンデザイン導入の背景として」『相模女子大学研究紀要』72A（2009）（樋口）

玉置照信（たまき・てるのぶ） *1879～1957*

1879（明治12）年和歌山市本町に生まれる。1896年秋に上京し、浅井忠に学ぶ。1898年3月の明治美術会創立十年記念展に油彩画《魚類》《娯楽ノ友》《鯛》を出品。同年東京美術学校西洋画科選科に入学。黒田清輝の指導を受ける。1900年4月のパリ万国博覧会に白馬会より油

彩画《昼餐支度》を出品。同年7月東京美術学校西洋画科選科を卒業。同年9月の第5回白馬会展に油彩画《漁夫》など11点を出品。1902年女流画家竹内茂登子と結婚。下谷区谷中上三崎北町22に住む。同年、夫人らと「紫玉会」を結成し、第1回展（10.30～？　上野・第五号館）を開催。同展は油彩画・水彩画・日本画・刺繍画・彫刻など250点が並ぶ大掛かりなものであったが、自身も油彩画《裸体》《弄花》《見送》など自作100余点を出品した。翌1903年3月の第5回内国勧業博覧会に油彩画《見送り》を出品。夫人も油彩画《夕暮》が入選した。また、紫玉会第2回展（9.11～？　上野・第五号館）を開催。前回同様、全体で「数百余点」が並んだが、自身も油彩画《秋》《魚類》《町はづれ》、水彩画《磯》《畑》《新月》など多数を出品した。一方、この年（1903）東京の国華座の舞台装置を担当。以後は舞台装置家としての仕事が増え、真砂座・本郷座、さらに大谷竹次郎の知遇を得て、新富座・明治座・歌舞伎座、京都の南座、名古屋の御園座、大阪の角座・中座などの大劇場でも舞台装置を手掛けたという（日野耕之祐「小伝」『玉置照信画伯遺作集』所収による）。その間、1919年に和歌山出身で東京在住の美術家で結成された「南紀美術会」に夫人と参加。1932年にはアトリエを新築し、犬・猫・小鳥・草花・裸婦・風景などを主題に、晩年に至るまで油彩画・日本画を描いたが、小品が多かった。版画は1935年頃に渡辺版画店から出版されたようで、同店の『木版画目録』（1935年4月10日発行）の「予告」欄に「玉置昭〔照〕信氏の試作」と題する記事があり、「本年一月十八日の浮世絵同好会へ出席して「浮世絵と富士山」と云ふ題で玉置照信氏が富士山の下図を持参して講演材料にせられて興味ある話しがありました。其から後に氏の画室へ招待されて描画を拝見すると特殊変つだ〔た〕技巧が加はつた画が多数あり、経歴を伺ふと二十五ケ年間も初期の新俳優団の舞台装置を考案して描かれし由。下図も可なりあります。目下余暇を利用して、日本画洋画南画の特長を研究して顔料を永久に保つて感じの良い芸術を作られて居り、特に木版画には元より興味を有たれ、また富士山の下図が多数ある為め、其を主にして猫、犬、人物等を追々と上版する事に相談しました。目下摺刷に着手して居るのは御殿場表富士と精進湖富士二図を色彩を替へて優れた感じの出る様に試みて居ります」と紹介されている。1957（昭和32）年6月21日東京都で逝去。翌1958年には、遺族により早稲田大学坪内博士記念演劇博物館へ自筆舞台装置図と関係資料959点が寄贈。また、遺作展（12.12～16　大手町・産経会館）が開かれ、油彩画・日本画・デッサン・漆絵など約200点が並ぶとともに、『玉置照信画伯遺作集』が上梓された。【文献】『玉置照信画伯遺作集』（玉置照信画伯遺作刊行会1958）『美術新報』1－17・2－14／『木版画目録』（渡辺木版画店　1935）／『東京美術学校一覧　従大正六年至大正七年』(東京美術学校　1918)／『明治期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　1994）／『内国勧業博覧会美術品出品目録』（東京文化財研究所　1996）／『明治期万国博覧会美術品出品目録』（東京文化財研究所　1997）（三木）

玉上常雄（たまがみ・つねお）

1939（昭和14）年の造型版画協会第3回展に木版画《外人住宅》に出品。出品時は横浜に住む。その後も第4回展（1940）に《柘榴》、第5回展（1941）に《烏賊》（「独」の名前で出品）、第7回展（1943）に《山》《紫陽花》《保土ヶ谷風景》《ざくろ》《いか》の5点を出品した。【文献】『造型版画協会第三回展目録』（1940）～『造型版画協会第七回展覧会出品目録』（1943）（三木）

玉上　独（たまがみ・どく）➡玉上常雄（たまがみ・つねお）

玉城　鉄（たまき・てつ）

1931（昭和6）年の第4回プロレタリア美術大展覧会に版画《連続版画「旗」のうち（失業都市）中一部》《プロレタリアの城砦・工場》を出品。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　2002）（三木）

玉村善之助（方久斗）（たまむら・ぜんのすけ／ほくと）

1893～1951

1893（明治26）年4月4日、京都市中京区新京極錦天満宮付近に生まれる。1911年京都市立美術工芸学校を卒業し、京都市立絵画専門学校に進学して菊池芳文に師事する。1915（大正4）年同校を卒業、日本画研究団体「密栗会」を結成して日本画家として活動を開始、第1回展を開催する。この頃「北斗」の雅号を使う。同年第2回再興院展に出品し初入選、「方久斗」の号を使用する。1916年一旦密栗会を解散し第2次密栗会を結成する。この年東京に移り住む。1918年第5回再興院展に出品し樗牛賞を受賞、会友に推された。1920年日本美術院を退会、この頃から一色活版社長吉田信賢との付き合いが始まる。1921年「高原会」を結成して新傾向の日本画制作へ向かうとともに、機関誌『高原』を創刊して出版活動に取り組み始める。この年白木屋で第1回展とポスター展を開催。1922年、新興の日本画団体が大同団結して第一作家同盟が結成され、高原会も参加する。それを機会に『高原』を廃刊し、美術雑誌『エポック』を創刊した（7月）。また、この年10月に織田一磨から石版画制作機材を譲り受け、『エポック』Ⅲ（11月）とⅣ（1923年1月）の表紙をオリジナル石版画によって飾った。同時に、両号に「石版画について抱負―都会の動力と栄養の出版について―」を掲載し、石版画及び石版画家の芸術的位置の向上を目指すと説く。1923年1月に東銀座に東京商業広告図案社を設立、4月には石版多色刷り11葉を収める版画集『都会の動力と栄養』を刊行した。1924年、雑誌『ゲエ・ギムギガム・プルルル・ギムゲム』を創刊（6月）。東京美術倶楽部で第1回個展を開催し、『雨月物語絵巻』のほか多数の石版画を出品した。また三科の結成に参加。1925年、三科の第1回展（会員展、5月）と第2回展（公募展、9月）に出品、さらに「劇場の三科」（5月）で自作の前衛劇を上演した。一方、『みづゑ』版画号（1月）に「創作版画と印刷器械」を寄せ、「精巧なる印刷器械によつて、オリヂナルに等しき幾万枚かの作品を獲ることを考へる」と記して、ロシア構成主義のヴェシチの造形概念につながる制作に向かっていることを公表する。この年現在の杉並区荻窪に三科式の家を建てて転居する。1926年「単位三科」を結成し翌1927（昭和2）年に第1回展を開催、「劇場の三科」でも自作の劇を上演した。1930年に方久斗社を創立、1935年に解散し「新興美術家協会」を結成した。1938年に同協会福岡第1回展開催の際は恩地孝四郎と小野忠重が参加し、版画家らと交流。この頃《猿と男》《女》などのエッチングを制作したと推定。1939年『随筆世の中』（高見沢木版社）を上梓。戦後も日本画家として活動し、挿絵や装幀も手掛けた。エッセイストの玉村豊男は五男。1951（昭和26）年11月7日東京都で逝去。【文献】『大正

期新興美術資料集成』（国書刊行会　2006）／『日本画変革の先導者　玉村方久斗展図録』（神奈川県立近代美術館ほか　2007）（滝沢）

田村　清（たむら・きよし）

1930年、青森での最初の版画同人誌『緑樹夢』は、青森中学校の同級生であった柿崎卓治・佐藤米次郎・根市良三の３人によって発行される。この時、田村は３人の同級生で在学しており、『緑樹夢』に参加。その第２号（1930.9）に《子守》《都会》を発表（創刊号は未確認）。『緑樹夢』は３号で終刊。当時、青森では洋画が盛んであった。『緑樹夢』に刺激された若い洋画家たちは「青森創作版画研究所・夢人社」を組織し、版画誌『彫刻刀』（1931～1932）を誕生させる。田村も参加し、その第１号（1931.6）に《風景》《三本の木》を発表。第17号（1932.12）まで作品の発表を続ける。その間、1932（昭和７）年に青森中学校を卒業。青森市の郵便局に勤めながら版画制作に励む。その後、青森創作版画研究会・夢人社は『彫刻刀』を版画同人誌『陸奥駒』（1933～1935）と改題。第１号（1933.8）に《田舎家》を発表し、第17号を除いて第20号（1935）の《秋晴れ》まで毎号作品の発表を続ける。また、東奥日報社主催の第４回東奥美術展（1934.10.14～17　青森市公会堂ほか）に《郊外風景》（版画 or 油彩画？）を、第５回展（1935.10.17～20　青森市公会堂ほか）にエッチング《郊外風景》を出品。1934年に夢人社は『小品版画集　あをもり』を創刊。その第１集（1934）の《玩具》を始めとして、第2、4集にも作品を発表する。その後、夢人社編で手工社が発行した版画誌『不那の木』第３集（1935）にも《蔵票》を発表。また、佐藤米次郎が発行した蔵書票関係の版画誌『サトウ・ヨネジロー蔵書票集』の［第２年］-1（1935.4）に蔵書票２点、［第２年］－３秋の集（1935.10）に２点の蔵書票と小文「僕の版画と蔵書票」、第３年-1春の集（1936.5）には蔵書票《風鈴》を発表する。「僕の版画と蔵書票」を要約すると、田村は白黒の版画を得意とする一方で、多色刷りの版画が作れないため、自信を失い、一時『陸奥駒』同人を退会したが、米次郎に蔵書票を奨められ、方寸サイズの中に幸福と希望を感じて、また制作するようになった、と版画への思いを語っている。さらに『趣味の蔵書票集』（夢人社発行）第1･3･4回（1936-1939）にそれぞれ２～３点の蔵書票を、『サトウ・ヨネジロー蔵書票集』は『月刊蔵票』（1937-1938）と改題して復刊。その第1･3･5･6号に各１点の蔵書票を発表する。このほか、情報誌『むつごま』（1938-1939）の第６・７号（1939）に小文を寄稿。前述の『陸奥駒』は第20号（1935.12）で休刊し、再刊する形で『青森版画』全２号（1939）を発行。その創刊号（1939.2）に《雪原》、第２号（1939.5）に《Ｓ村役場》を発表した。【文献】『東奥年鑑』昭和９・10年版（東奥日報社　1934･1935）／「同人消息」『陸奥駒』19号（1935.10）／『緑の樹の下の夢―青森県創作版画家たちの青春展』（青森県立郷土館　2001.10）／『東奥美術展の画家たち－青森県昭和前期の美術－』展図録（青森県立郷土館　2005）／『創作版画誌の系譜』（加治）

田村孝之介（たむら・こうのすけ） *1903～1986*

1903（明治36）年９月８日大阪市に生まれる。1920年上京して太平洋画会研究所に学ぶが、翌年父の死去もあり大阪に帰り小出楢重に師事する。1924年の「信濃橋洋画研究所」設立後は同研究所に学ぶ。1927年第14回二科展に《裸婦立像》《風景》が初入選、この年母の実家である大西姓を相続するが、田村姓をそのまま画号とする。1937年二科会員となる。戦後は宮本三郎らとともに「二紀会」創立に参加、以後同会に出品を続けた。1974年宮本三郎死去のあとを受けて二紀会理事長となる。1984年芸術院会員、1985年文化功労賞受賞。裸婦・人形・風景画を得意とした。1986（昭和61）年６月30日東京で逝去。版画の制作は、高見澤木版社から刊行された小磯良平・木村荘八ら10作家による木版画集『美人十粧』（1935頃全10枚）に《窓辺の女》１図を制作のほか、1970年頃より「フランス人形」の題材を好んで描き、「人形」をテーマとしたリトグラフ作品もある。【文献】『高見澤木版社版画目録』（1929.11）／『日本美術年鑑』昭和62・63年版（東京国立文化財研究所　1989）／『田村孝之介画集』（日動出版部　1977）（樋口）

田村彩天（たむら・さいてん） *1889～1933*

1889（明治22）年10月石川県金沢に生まれる。本名福島外喜雄。1912年東京美術学校日本画科卒業後、寺崎広業に師事。1920年第２回帝展に《春日午後》が初入選、1925年第６回展で《夢殿》、1927年第８回展で《鳳池春宵》が特選となり、1929年第10回展より帝展推薦（無鑑査）となり審査員も務めたが、1933（昭和８）年９月10日逝去した。東京湯島の画報社から出版された磯田長秋・川崎小虎ら６作家による『東京震火災木版画集』（1924年１月から12月まで毎月３点の版画を予約頒布した）に《秋晴のバラック》《雨の天幕病院》《本郷座の焼跡》《夕陽に映ゆる女神象像》《野毛の山から》《野外学校》の６点の木版画を制作した。【文献】『美之國』9-10（美之國社　1933.10）／『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社　1998）／『版画にみる東京の風景』（大田区立郷土博物館　2002）（樋口）

田村清作（たむら・せいさく）

東京の料治熊太が主宰した版画誌『版芸術』第９号（1932.12）全日本版画家年賀状百人集に雪景色を描いた《賀状》を発表。田村清と同一人の可能性もある。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

田村富久子（たむら・ふくこ）

東京の文化学院では1933年秋に専修科でのエッチング講習会を行った。女学部でも1934年３月７日、赤城泰舒先生の指導のもと、日本エッチング研究所の西田武雄講師により３年生教室においてエッチングの実習（受講者10名）が行われた。女学部３年在学中の田村も受講し、自画像と思える作品が研究所機関誌『エッチング』第17号（1934.3）に掲載されている。【文献】『エッチング』17（加治）

為蔵（ためぞう）

東京神田で発行された版画同人誌『艸と風』第１輯（発行年不明）に《とり札》《雪の夜》、第２輯（1931.3）に《山羊の春》《風信草》《少女》、第３輯（1931.7）に《エキスリブリス》を発表。目次には苗字の記載はない。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

多毛津忠蔵（たもつ・ちゅうぞう） *1888～1975*

1888（明治21）年２月19日、鹿児島県奄美大島に生まれる。本名は「保忠蔵」。奄美中学卒業後、東京で私立学

校の校長をしていた長兄を頼って上京し、専修大学で政治経済を学ぶが2年で中退。1914年東洋と西洋の美術を学ぶために日本を離れ、朝鮮・中国・東南アジア・インドなどを放浪、1919年ヨーロッパに渡る。1920年12月アメリカに辿り着き、1948年までニューヨークに定住する。この間、陶器の絵付けやインテリアのデザインなどで生計を得ながら、ジョン・スローンや国吉康雄らと交遊し、1924年第8回独立美術協会展(1917年4月ニューヨークで組織された無鑑査・無償の団体。第1回展には国吉康雄ら20余名の邦人作家が出品した)に出品、その後会員となる。またニューヨーク在住日本人画家による紐育新報主宰「邦人美術展覧会」(1927・1935・1936・1945秋or1946)に出品するほか、米国の各種展覧会に出品し、「タモツ」の名が知られるようになる。また、中国を分割し合う日本を含む軍国主義の国々の横暴さを批判し、1933年《切り裂かれた中国地図》《軍国主義に注意せよ》などを制作。1941年の日米開戦を機に、米国陸軍に志願し、戦略局の従軍画家として中国・ビルマ・インド戦線に派遣され、中国昆明で日本に投下される降伏勧告ビラなどを描いた。戦後はニューヨーク生まれで終戦の一時期極東軍事公報局の秘書として日本在住の経験を持つルイーズ・ケルツ(画家・野田英雄夫人の姉)と1948年に結婚し、ニューメキシコのサンタフェに移住。友人ジョン・スローンが所有する建物をアトリエとして晩年まで制作を続けた。1975(昭和50)年5月28日逝去。版画の制作は、エッチング《Alley(路地裏)》《Watering Horse(水を飲む馬)或はWater　Tower(水道栓)》(1945頃)、リトグラフ《花と猫》(1950頃)の3点が日本における各種展覧会図録で確認できる。1958・59年にはサンタフェ美術館で「版画と素描画」展を開催している。【文献】『太平洋を越えた日本の画家たち』展図録(和歌山県立近代美術館・広島県立美術館ほか　1987)／『アメリカに生きた日系人画家たち　希望と苦悩の半世紀　1896－1945』展図録(東京都庭園美術館・大分県立芸術会館ほか　1995・96)／『野田英雄・多毛津忠蔵』展図録(熊本県立美術館　1992)(樋口)

丹慶俊二(たんけい・しゅんじ)

日本美術学校を卒業(年次は不明)。1929(昭和4)年10月に創立された帝国美術学校の西洋画科の専任助手として勤務。同校の教授並びに教務主任を務めた金原省吾の1935年3月の日記などを読むと、西洋画科の開設準備から手伝っていたようであるが、1935年3月に学校の助手採用の方針変更で退職している。一方、1925年から1933年にかけての公募展に画家としての足跡を残す。まず、1925(大正14)年の第6回中央美術展に洋画《静物》、翌1926年の第3回白日会展にも《金仙花》が入選。1927年からは春陽会展に出品し、同年の第5回展(1927)に《春郊》《秋庭球戯》、第6回展(1928)に《葱畑》、第7回展(1929)に《新緑の郊外》、1930年の第8回展(1930)に《青草の畦》、第9回展(1931)に《松と麦畑》、第11回展(1933)に《タンクの見える風景》が入選した。このうち資料によって出品作品が確実に版画であったと確認できるのは、第7回春陽会展の《新緑の郊外》(価格15円)のみであるが、展示室・価格などから推定すると、第6回展の《葱畑》(価格15円)も版画であった可能性が高い。【文献】「私立帝國美術学校事情」『武蔵野美術大学　大学史史料集　第四集　『申請書等』(武蔵野美術大学　2004)／『武蔵野美術大学　大学史史料集　第六集　『金原省吾日記』　昭和十年』(武蔵野美術大学　2009)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所　2002)／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』(東京文化財研究所　2006)(三木)

段塚魚郎(だんづか・ぎょろう)

➡段塚青一(だんづか・せいいち)

段塚青一(だんづか・せいいち) *1900～1984*

1900(明治33)年1月、岡山県阿哲郡上市村(現・新見市上市)に生まれる。本名は安雄。戦前の詩と版画の制作には「青一」を、戦後の版画制作には「魚郎」を雅号として使用。高梁中学校を卒業し、東京の武蔵野美術学校に絵を学ぶが、健康を害し、郷里の上市村に帰る。新見の思誠小学校の正教員となり、その後の17年間は岡山県内と朝鮮半島南部の教員を続ける。この頃にはすでに詩を創作しており、1930年に日本詩学協会から詩集『銭苔の花』を上梓する。その以前から『犀』(未見)の同人であり、早くから同人誌『群像』(未見)も発行。1930年に北川冬彦らが創刊した詩誌『時間』の第10号(1931.4)から参加し、第12号(1931.6)まで詩を発表する。その後『時間』は『詩と散文』と合併して文芸同人誌『磁場』となるが、その第1号(1931.9)に詩《墜》ほか2編を寄せるが、2号以降に作品の発表はない。版画は1920年代から制作しており、1921年制作の《猫(ねこ)》が現存している。1933年1月には上市村で詩と版画の同人誌『版画と詩』を創刊。これは版画を台紙に貼り、謄写版で刷った詩のページを併せた簡単な造本で、詩人仲間の詩と段塚自身の詩と版画、それに彫りと刷りを担当した版画で構成されている。第1輯(1933.1)に木版画《蛙》《S子の像》《城》《スキー》《くはづ芋》と詩2編、それに表紙などの版画の彫りと刷りを担当。第2輯(未確認)。第3輯(1933.5)に木版画《起重機》《或る物語》《黙闘》と詩1編を発表。『版画と詩』第3輯に詩を発表していた関谷忠雄との関係からか、版画の大衆化を目差した新版画集団に参加し、第4回新版画集団展(1934.6.1～6上野・松坂屋)に《廃屋》を出品する。1940年に合同新聞(現・山陽新聞)の記者となり、1952年6月に新聞社を辞すまで敏腕を揮う。その後は若い頃に写楽と出会い、浮世絵に魅せられていたことから、50歳を過ぎていたが版画家としての活動を再びはじめる。版画は中・小品が中心で、多色摺りの詩情豊かな作品。1984(昭和59)年12月9日永年患ったスモン病が因で逝去。【文献】小田切進編『現代日本文芸総覧中巻』(明治文献　1968)／樋口良一編『版画家名覧』(山田書店版画部　1984)／「段塚魚郎版画展［案内チラシ］」(新見美術館　1993.7.7～9.5)／仲町貞子著「『時間』の人々」『コレクション・都市モダニズム詩誌　第5巻　新散文詩運動』(ゆまに書房　2011)／『創作版画誌の系譜』(加治)